荒木経惟

不純文学 私のアリスたち

一

私は、去年の夏、妻と日光へ行った。古い理髪店があった。その店をのぞいていた妻は、そのアンティックな椅子にすわりたいと言いだした。「私の妻は幼い頃、床屋のおじさんにとても可愛いがられたのです。アメ玉をくれたり親子風船（コンドーム）をくれたり、とても可愛いがってくれたそうなのです。そのオヤジは、自分もアメ玉をナメながら散髪したのです。その頃もあんなオカッパだったそうです。ベトベトした濡れたアメ玉を、私の妻のアソコに入れたり出したり、ナメナメしながら散髪したというのです。（実は、この話は妻の寝物語なので私は信じてはいない。）そんなわけで昔からの床屋さんの椅子を見ると、すわりたくなってしまうらしいのです。ともかくもうすこしすわらせておいて下さい。昔を懐かしませてあげて下さい。」と、私は店の主人に、リアリスムにスムースに作り話をしてお願いした。

「屁えー、悪い床屋もいたもんだ。オーイお茶、でも出してあげな。（小声で）こりゃあ女房には内緒だけど、アタシャ床屋仲間じゃ下苅り甚五郎っていわれてるんだ。アンタの奥さん色白で美人だねえー、どうだね、アンタの奥さんのヤラせてくれないかね。」

「屁えー、人は見かけによるなあー。私たちはすぐ近くの金谷ホテルに泊ってるんです。201号室です。ぜひヤッて欲しいなあ。」

そんな話をしているとはしらず、私のアリス、妻ヨーコは昔を懐しんでいるようであった。唖になって、過去を見つづけていた。

その夜おそく、甚五郎さんはやってきた。一本一本いつくしむように剃るので、私は剃りはじめる時からタツているのに、二時間もたってしまった。甚五郎さんは、たっぷりと楽しませていただきやしたと、料金もとらずに帰っていった。部屋のドアがしまるやいなや、私は見ただけで射精してしまいそうなパイパンアリスにソーニューした。もちろん即射精、だって二時間も我慢コしてたんだもん、しょーがないじゃん。金谷ホテル自家製の食パンはうまい、虎屋のヨーカンもうまい、私のヨーコは特別うまい。

ソク射精ソノ瞬間、おヘソから虹色のアメ玉がピョッコンととびだした。私は、そのアメ玉をすばやく口に入れるやハレルヤ、ヨーコの過去をぶっこわしてしまおうと虫歯でないほうの奥歯で力一杯冷や酒一杯ハマグリ噛んだ。ガッチーン、歯がかけてしまった。痛いのなんのって、私は部屋中をかけまわった。ヨーコのパンティにからまってころんだりもした。それはそのはず、アメ玉だと思、想していたのが、ビー玉だったのだ。

右の手のひらに虹色のビー玉、左の手のひらにはかけた奥歯、交互に見つめながら私は、痛みをこらえつつ、妻が初夜の朝に言ったことを思い出していた。

「この虹色のビー玉は、母のかたみなの、母には近所で床屋さんをやっていた若い同い歳ぐらいの愛人がいたの。父と母は二十も歳がはなれていたの。その愛人と母と私とで、不忍の池の縁日に行った時、この虹色のビー玉を買ってくれたの、その愛人が。母は、お父さんには内緒よ、って綿アメ買ってくれたわ。私は母が好きだったから、だまっていたわ。でも近所で噂になっちゃって、そのことを知った父は激怒して、母を殴るけるつっこむ、そりゃー大変、近所の人たちが止めてくれなかったら母は死んでしまったわ。そんなことがあって一週間後、母は死んだの。床屋の椅子にすわったまま、愛人に首（ノド）を切ってもらって、死んでしまったの。愛人もその椅子の横で首を切って死んでいたんですって。母の顔は、きれいに剃ってあって、オヒナ様みたいだったって、近所のおばさんに私が高校にはいったころ聞いたのねえ、もう一度抱いて。」

私は、もう一度抱いた後、風にあたりたくなってカーテンを開けた。朝焼けだった。窓を開けて内臓の隅々にまで冷気を吸いこんだ。

二

「……戸外には風が吹暴れて（ふきあれ）居た。」と、田山花袋の『蒲團』（ふとん）を読み終えて、神楽坂に独歩に出た。今日は、五月十三日、田山花袋の命日である。偶然である、いや神あるいは仏のめぐりあわせであろう、神楽坂書店に昭和四年五月十五日発行の春陽堂版『明治大正文學全集第二十三巻、田山花袋』があった。たったの五十円、もちろん即買う。私の書斎は新潮社の裏近所にあるので、新潮社発行の

東京の16歳・少女オナニー

『日本文學全集8、田山花袋集』を五月十三日は田山花袋の命日ということで、ついさっき読み終えたところであったが、私は、春陽堂版との出会いに感激して近くの白銀公園のベンチでもう一度『蒲團』を読むことにした。

「これで自分と彼女との關係は一段落を告げた。三十六にもなって、子供も三人あって、あんなことを考へたかと思ふと、……」思えば私も、五月二十五日（双子座）で三十六である。こりゃあー単なる偶然なんてもんじゃないぞ、と読書はやめにして空を見た。噫、麗わしの五月、緑、風爽やか、少女たちが鉄棒に興じている。

私は、グルッと回転するたびに見える白いパンツの中心部分を見ていた。

その中にオサゲの少女がいた。友達が帰った後も、たったひとりで遊んでいた。私は近くの駄菓子屋でアイスクリームを二つ買うと、そのオサゲの少女を呼んだ。二人でベンチにすわってアイスクリームを食べた。私はもう一度駄菓子屋に行って、こんどはハリスガムを買った。少女は待っていた。二人でガムを嚙みながら「カーラース、なぜ泣くの、カラスはヤーマーにー」と合唱した。私の手は少女の白いパンツの中にはいりこんでいた。オサゲなのに、毛がはえてなかった。まだ少女は七歳なのだから当然なのであったが、私はアガッていたらしく、毛がはえてないことを不思議だなあ、不思議だなあと思、想しつつ、私の手は左中指薬指を先頭にワレメへと移動していた。到達した。なんだか指がいつもより大きくなっているように思えた。ともかくそーっとソーニューしてみた。驚くなかれ濡れていたのだ。いつもより太くなっていた左中指薬指が簡単にはいってしまったのだ。私は感嘆した。私は兎穴の中の左中指と薬指をゆっくりと動かしはじめた。

夕焼けだった。

私は、鉄棒に興じていた少女たちを見たあと、『田山花袋集』を蒲團にしてベンチに寝ころんで暮れてゆく空を見ていた。ずーっと空を見ていたからであろうか、そんな空想をしてしまったのであった。

鉄棒では、まだ少女たちが遊んでいる。私は、夕焼けのせいであろうか、やや赤面して公園をあとにした。神楽坂をのぼりながら、

ブラウン管の中のアリス達

浮気なアリス・横山芳子（アテネフランセ在学中本名エダ）

したかなー、などと過去を思い出しつつ書斉へとむかった。

「東京の十六歳、少女オナニー」はどうしているかなー、もう結婚

三

私は書斉に、テレビを置いている。聞くところによると、五木クンも書斉にテレビを置いているらしい。さすがである。いつでも大好きな歌謡番組を見られるようにしてある。原稿が遅いのは、そのせいなのである。決して文才がないのではなく、テレビの歌謡番組が私の流暢な執筆活動を中断してしまうのである。ついでながら、私が使用している原稿用紙は野坂クンと同じ神楽坂の相馬屋製である。

テレビの中の少女歌手たちは、まさしく現在のアリスである。モモエも、ジュンコも、ヒロミ、ヒロミも、マサコも、アグネスも、さゆりも、メグミも、ジュンコもみーんなみんなアリスである。

聞くところによると、歌謡番組の時は、あの男根をマネてつくったマイクロフォンから精液の蒸気を出しているということである。テレビ局もなかなかやるなあー。

四

あれから二年もたった。あの日、芳子はアンネだった。私アー・キャロルのイヤらしい注文を最初はイヤがっていたが、芳子は私を深く愛していたがゆえ、深くソーニューしていたタンポンをひっぱりだしてくれた。私アー・キャロルは、そのメンス血をたっぷりたぷたぷ吸いこんでいたタンポンを三分の一ほど飲み残してあった白ワインのビンの中にソーニューした。

咲いた咲いた桜が咲いた、速い速い新幹線は速い、チンチン電車はブーラブラゆれる。私アー・キャロルは、そのゆれている薄紅桜をしばらくの間、凝視していた。

酔ってしまった。いささか睡眠してしまったらしい。目が覚めた時は、ワインがからになっていた。芳子が言うには、あのヴァンローゼワインを私アー・キャロルは飲んでしまったらしい。念のため私は毒掃丸を三粒ほど飲んでおいた。

芳子は、新しいタンポンをソーニューしないで待っていた。アー、

さそり座の女・慶応大学一年生の大島良子さん

メンス血ベチャベチャ、クリスチャンの芳子クリトアリス。私は早急にソーニューした。ヌルリリとはいりこんだダンコンタンポンは、いつもより膨張度大、アー・キャロル暴発。それにしても早漏すぎる、いくら視覚勃起していたからって、もうすこし我慢コしてあげなくちゃー、それが愛ってゆーもんよ。食べることだけが愛じゃないのよ。

戸外はすでに夜であった。薄暗い部屋、芳子の好きな30Wの電気スタンド。新たなるメンス血と精液とがまざりあって、トローっとブルーのシーツに流出した。

眼帯をしたクロネコ、上手より登場。それをペロリペロリとナメる。眼帯は芳子が以前つかっていたアンネナプキンの残りでつくったもの。下手よりゴキブリ、ホイホイサッサと登場。クリトアリスをナメたあと、中にはいりこもうとする。

このやろうーっ、ブッ殺してやるーっと、私アー・キャロルは、菊一文字短小イヤ短刀もつやズブーッとひと突き、いきおいあまってアリスにもブズーッ、し、しまったあーと思、想した時はもう遅い、アー、私アー・キャロルは、アー、愛する芳子を、アリスを、アー、アー、カラスではないぞ、アー、アー、と絶句。ついでに一句、

桃の節句の思ひ出に買った短刀夕やけこやけ

ワカルカナー、ワカンネーダローナー、アーッと悪魔の悲鳴、五月は麗わし妊はヤるべし。(リンカーン)

し、しまったあー、悪夢だ、これは悪夢だーと大声で叫んでも目が覚めない。などともたもたして文章など書いていなければよかったのだ、至急救急車を呼べばよかったのだ。

芳子は出血多量で死んでしまった。悲哀と絶望とが忽ち私の胸を襲った。私は蒲団を敷き、夜具をかけてやり、冷たい汚れた天鵞絨の襟に顔を埋めて泣いた。

薄暗い一室、戸外には風が吹暴れて居た。遠くで五重ノ塔が燃えていた。私は、芳子が私を裏切った日の情景を思い出していた。

五

有栖川公園でセーラー服のアリスに出会ったのは、おととしの五

月であった。女優志願のまだ中学生だったセーラー服の関村妃ちゃんに恋をしてからというもの、私はまるでタイプライターで恋文をうつような気持で、そーっと、そして激しく、あの白い肌に触れるようにやさしく、一年間もシャッターをおしつづけてしまいました。

去年の夏の終りには、私たちは海に行きました。スポットライトのような真昼の太陽に照らし出された彼女は、まさにエロスそのものでした。高校生になった関村妃は、すでに、「女優」になっていたのでした。あれ以来、私たちは会っていません。

麗しの五月、妃ちゃんとのことを想い出しながら、私は、住友三角ビル51階のレストラン『シャーウッド』で昼食をしていました。新宿の街を眺めながらのローストビーフは格別でした。そこで良子さんと知りあったのです。食後に散歩でもどうですか、と私は、大島良子さん（慶応大学法学部一年十九歳11月10日生れ、さそり座）を新宿御苑に誘いました。閉苑まぎわまで私たちは、ロッキード事件や四畳半裁判について語りあいました。それからのコトは、彼女には婚約者がいるので省略します。

妻には内緒なのですが、ある女性の写真を定期入れの中に入れてます。その女性とは、お茶の水のニシワキ・ヨーコ絵画教室で知りあいました。明るい土曜日の午後、彼女は熱心に静物画をかいていました。私は一目ぼれしてしまいました。その日の授業が終ったあとで、私は画きかけの静物画といっしょにポートレートを撮らせてもらいました。その時の写真をトリミングして定期入れに入れているというわけなのです。私は現在、中村京子さん（日本女子大付属高校二年・十七歳・射手座・好きな画家ルノアール）に夢中なのです。

女優志願の中学三年生・関村妃ちゃん

私が現在恋をしている高校二年生・中村京子さん

構成・木村恒久

イメージ選挙

昭和3年、大阪に生まれる。グラフィック・デザイナー。「毎日デザイン賞」受賞。主著「キムラカメラ」。

ここ数年来、いづれの陣営においても、政治は最早、単なる合理的な技術でも、たてまえ的な理念でもなく、人間（人類）と文化の深層に大きくかかわるものであることについて、自覚が次第に深められつつある。それは政治におけるデモーニッシュなもの、パトス的なものへの直視によるリアリズムの重要視であろう。そこでは政治は、あるレベルでは、抽象的な政策技術のたたかいであるよりも、劇的な想像力を媒介として、空間の象徴性の操作をめぐってたたかわれることになる。

今ではすっかり定着した感のある「イメージ選挙」も、本来の意味はパトス的なものを重視した政治の神話的演劇空間の創出を意味していたようだ。抽象的な政治技術も、劇的な想像力を媒介にして、具体的に表示されるものに変質する。つまり、イメージのたたかいが、理念のたたかいに取って代わるのだ。したがって「イメージ選挙」とは、既成政治に抵抗する民衆サイドからの「政治のフォークロア」を具現化すると同時に、独占的な政治権力による、国家のスペクタル（演劇・ショー）化への志向の、両義性をはらんでいる。

ご多聞にもれず今夏の参院選でも「イメージ選挙」は花咲かり。政策論争軽視の、専らアグネス・チャンばりのアイドル型ニッコリポスターが街頭に氾濫した。つまり、ミヤケンさんも、キトウクンも、広告代理店のお膳立て通りのスター気取りで、〝チーズ笑い〟というのが、依然として、わが国「イメージ選挙」の実体である。いつもながら、民衆サイドの「政治のフォークロア」を志向するイメージの浮上などは皆無に近い。

〝チーズ笑い〟とは、芸能界で使い古された手品だ。スターたちがポートレートの撮影の場合、いかに不気嫌なひげづら狼男のスターでも、口元で〝チーズ〟とささやくと、不思議や写真映りが、花も恥じらうおぼこ娘型の微笑になるという寸法。（すましたいときは「逗子」とささやく）。

だが既成政党はいうに及ばず、変人、奇人と目される泡沫候補まで、申し合わせたかのような痴呆症的「チーズ笑い」ポスターの特徴は、立候補したご本人が、まるで選挙民のような顔付きで、投票者を安心させる点にある。その効果が、絶大な集票能力に結びつくのなら、現状の「イメージ選挙」は今後一段とエスカレートし、〝百面相〟の如き道化的哄笑をさそうバカヅラこそ、最も高い集票力を示めすことになろう。なぜなら人は、しばしば一番ばかげたものに投票しがちであるからだ。つまり「チーズ笑い」の選挙ポスターの氾濫は、公的な責任体制に対する軽蔑の反映でもある。したがって、政治不信が高まるほどに、バカヅラ、バカ笑いの「イメージ選挙」がバカ受けしだすのが、今日の政治的風潮ナノダ。

ガロは戦後の大きな「風景」でもあった。時代が風景から風流へ、風流から風俗へと変わって行くなかで、やはりガロは「風景」なのである。

目安箱㊺

「書けないということについて」

上野昴志

魯迅は、一九二七年の九月に『予想のほか』という雑感文を書いているが、その原題は『意表之外』である。内容と直接には関係ないが、この題自体ひとつの皮肉になっていて、いかにも魯迅らしい言葉の選び方だ、という感じがする。この「意表」とは意表を突くとか、意表に出るとかの「意表」で、それだけで「思の外」という意味だから、それ以上「外」をつける必要は全くない。それをわざと書いたのは誤って書いた人間に対してのあてこすりである。ずいぶんとイヤミに思えるかもしれないが、その誤った奴がタダ者じゃない。一九二四年頃口語文に反対していた林琴南である。林琴南は当時口語文を書く文学者達を非難して、彼らが口語文を提唱するのは、古文に通じてないからだ、といっていた。それが「意表の外にいず」と書いたからたまらない、早速見つけられて皮肉られた。魯迅は一九二四年の雑文「鬚の話」で一度使っている。それを三年後になっても、しかもあまり関係のないところにひょこっと出してくる。その辺が魯迅の独特な戦法であると同時に、作品表現を規定する論理であるといえるだろう。

ところでこの文章を出してきたのは、題について言いたいためでなく、その中味についてである。魯迅はここで、自分の雑感はどうしても悪口になる、ところがその悪口が悪口をいわれた方にとって有利になっているのを、今年になって発見したと書いている。どうしてかというと、魯迅の雑感が、悪口をいわれた者たちの間で「義兄弟のちぎりを結ぶ証書」になり、「俺たちは一しょだ」ということになる。又、何かうまくいかないことがあると魯迅のせいになって、悪口をいわれた方が「潔白」ということになる、というのである。

「悪口」というものは決していいものではないと誰でも考えるであろう。ところがある一部の人には有利なのだ。人類とは結局怕るべきものである。人をかみ殺す毒蛇まで、商人はそれを酒に漬けて、「三蛇酒」だとか、「五蛇酒」だとかいって、金をもうける。

こういったやり方は、実際「交戦」よりはずっとひどいものである。私には雑感を書くこともできない。だが今度書くときは「雑感も書けない」という雑感を書く。

「こういったやり方」から「私には雑感を書くこともできない」までのところは原文を逐語的にみていくと、「こういったやり方は実際「交戦」よりひどく、（それが＝こういったやり方が）私をして雑感を書けないようにする」となる。即ち、単に雑感が書けないのではなくて、「こういったやり方」によって雑感が書けなくされるのである。そこでは、漠然と「書けない」のではなく、「書けなくされている」状態と、そうさせているものがはっきりと自覚されている

のである。それは、批評としての文章が現実に対して無力であるという一般的な問題をこえて、情況にかかわっているのだ。「こういったやり方」が「交戦」よりひどく、雑感を書けなくするとは一体どういうことか。あからさまな論争を交えるならば、敵の言葉を打ち砕くこともできよう。あるいは又、そのことを通じて他者の幻想を突き破るかもしれない。だが自分の投げかけた言葉が敵にとりこまれ「利用」されてしまったら、批評も又自慰にすぎない。それは効用の問題などではない。批評とし自立するか否かの問題である。情況が強いてきたのはそのことである。それに対して魯迅は、「雑感も書けない」という雑感を書くと切り返す。書けないならば、書けないということを書く以外にはない。書けないという事態を回避することはできない。相対化を強いてくる情況を逆に相対化するのである。それは魯迅にとって一貫して変らない方法であった。というよりも、それこそ魯迅の存在を成立させる運動であった。だが問題は運動一般ではなく、この時それがどのような動きをしたかにある。

一九二七年は四月に蒋介石がクーデターを起こした年である。魯迅は四月十五日以後、六月に『香港略談』という雑感文を一つ書いた以外は七月に講演（「読書雑談」「魏晋の気風および文章と薬および酒の関係」）があるだけで九月までは何も発表していない。それは、「硬い刀」の横行した時期であり、魯迅が現実に生命の危険に晒されていた時期であるが、魯迅の沈黙は単にその外的情況の厳しさに由来するものではない。逆に、九月になって書かれた雑感文の苦渋に満ちた調子、書けないことを書いている屈折は、外的情況の厳しさが強いたものだけではない。

……先生、あなたは多分、読んでいられると思いますが、私は前に中国には「叛逆者のために泣こうという弔い客」がありがないのを歎いたことがあります。それがいまどうでしょう？あなたもご覧のとおり、この半年の間に、私は一こともそれをいったでしょうか？けれども教室では私の考えを公表したのです。けれどもそのころ私の文章はどこにも発表するところはなかったのです。けれども私は早くからもう何もいわないことにしていたのです。だがこれらのことはみな私の弁解とすることはできません。要するに、いまごろ、あのあたりさわりのない「子供を救え」（狂人日記）というような議論をまた持ち出したところで、私自身が聞いても空虚なものに思うのです。（『有恒氏に答える』）

訳文では長くなってその調子が伝わらないが、原文は、わずか二行に「けれども（雖然）」が三つ続き、そこから一挙に「要するに（総而言え）」というところへ飛びこんでいく切迫した調子で書かれている。教室では公表した。文章は発表できなかった。いや、自分は何もいわないことにした。というように想念がうねり、だがそんなことは何物でもないと、それらの想念を否定する。この魯迅内部における屈折それ自体が、書けないということを書かしている、あるいは書くことを書けなくしているモメントにほかならない。それは、「硬い刀」の横行する情況をうけとめた魯迅の、精神の軌跡であるといえるだろう。そしてそれが、自らの言葉の空虚として対象化された時、「書けない」という情況を敢て書く行為にゆかせる否定のバネとなったとおもわれる。

現在何かを書くというのはどういうことなのか。魯迅をとらえていた情況がそのまま現在に重なるわけではない。だが、書くという行為を成立させる基本的な運動には変りがないように思われる。（68年9月27日）

目安箱 ―― 131

ハンブルグの水道の話

上野昂志

森鷗外の先生にマックス・ペッテンコーファーという衛生学の大家がいる。わたしは、呉智英先生とは違って鷗外全集など読んでいないのでよくは知らないが、鷗外は、このペッテンコーファーの論文『衛生都城の記』を翻訳しているということである。いずれにせよ前世紀末、鷗外がドイツで医学を修めて日本に帰った一八八八年以降も、コッホの発見したコレラ菌を、自説の正しさを証明するために飲んでみせたりした、たいへん元気な学者である。ここで自説というのは、このペッテンコーファー先生が、疫病研究におけるロカリスト、つまり、ある地域の土壌が疫病流行のもとであるという説をもっていたことをいう。だから彼はコッホが一八八三年にコレラ菌を発見して、菌による直接感染説を唱えたのに反対して、それを否定するために、自分でコレラ菌を飲んでみせたりしたのだ。相当に乱暴な先生だったらしい。いまから考えれば阿呆みたいな話だが、医学の草創期なんてそんなものなのだろう。しかもこの先生、菌は飲んだけどピンピンしていたので、それを見ていた学者たちは、あやうく土壌説を信じそうになった……

しかし、といって、この先生が常に乱暴一点張りの人だったと考えるのは早計である。彼が土壌説に立って、ミュンヘンの土地をよくするために暗渠工事を起こし、それまでは溜池式だった便所を桶式に改めたことは、たんに不潔なミュンヘン市をヨーロッパ第一の衛生都市にしたばかりでなく、実践的な衛生学の確立に道を拓くことにもなったのだ。

事実、当時のヨーロッパは、とくに水の関係が相当不潔だったようである。鷗外が、これはコッホ博士に師事してからの論文らしいが、「水道中の病原菌」などというのをものしたのも、むろん病原菌の発見があったが故のものとしても、当時のヨーロッパの水が、日本などでは想像もできない状態にあったからなのではないだろうか。たとえば、これは鷗外が帰国して十年後のことだが、ハンブルグでは、その水道の不潔さがもとでコレラが大流行している。

そして実は、わたしがペッテンコーファーのことなど持ち出したのはそのハンブルグの水道の話が面白かったからで、ほんとうは鷗外もコッホもつけたしにすぎないのである。

さて、そのハンブルグの水道というのは、エルベ河から取っていたのだが、当時、産業革命で都市の人口が急増し、その需要を満たすために河からポンプでくみ上げていた。ふつうは、くみ上げた水を貯水池にためてから鉄管で各戸に給水するのだが需要が多くて沈澱させている間がない。その結果、エルベ河の水がじかにハンブルの街にいくことになって、水道からは、ウナギや小魚が出てきたり、鉄管には藻がつまったり、エビやカニがつまったりした。だから街の人たちは、自分たちの飲料水をスープと呼んでいたという。

当時のハンブルグの水道の蛇口がどんなものか知らないが、とにかくヤカンなどを持ってそこをひねるとウナギが出てきたりエビが出てきたりじゃあ大変だったろう。わたしはドイツ人が、コップを差出して、スープをくれと苦々し気にいう光景を想って笑った。これでは、「水道中の病原菌」どころの話じゃない。

ところで、わたしは笑いながら鷗外のことやビスマルクのことを想像していたのだが、それと同時に、この話が何故おかしいのか、ということをも考えていた。たしかに、水道からウナギが出てきたり、鉄管のなかをエビが這いまわっている図を想うとおかしい。しかし、それだけで

この話が面白いのかというと、どうも少し違うような気がするのである。いいかえれば、この話が、たんにお話だったなら、つまりは純粋フィクションであったなら、それでも面白いだろうか、ということである。

思うに、これがたんなるお話だったら、わたしは、それほどの面白味を感じなかっただろう。あるいは、テレビなり映画なりの物語の一場面であっても、フィクションである限りは、同じだったろうと思う。ではこの話の面白さは、それが「事実」であったことに由来するのか――、だが「事実」とはいったい何なのか。

これまでわたしが書いてきたことは、すべてまったくの作り話、デタラメの嘘八百だということはあり得る。イヤ、そういってしまえば、この文章の読者が、わたしのつたない書きぶりでわたしと同じような面白味を感じたということを前提とするようなので、改めよう。わたしが読んだ文章そのものが、とくにハンブルグの水道に関するくだりが、まったくデタラメだったとしよう。書き手がそれを隠くしていた……それでも面白いか。やはり面白いと、わたしは思う。事実とは異っていても、そういう事実があったという話が面白かったのである。となれば、これは純粋に、表現の問題である。

従って、先にわたしが、これがたんなるフィクションだったら、さほど面白味は感じなかっただろうといったことも、もう少し厳密に書く必要がある。すなわち、これが純然たるお話としてワクづけられたフィクションならば、わたしの興味はほとんど動かなかっただろうというように。その程度のことなら、筒井康隆だって書いている。一昔前のシュルレアリスムみたいじゃないかと。

実際、いまのわたしは、水道の蛇口からウナギが出て来たなんていう話に、少しも驚きを感じなくなっている。ワニが出ようが、ゾウが出ようが、あっ、そう、という程度にすれっからしになっているのだ　むろん、我家の水道から実際にそういうものが出てきたらびっくりするだろうが、次の瞬間、それをどうやって他人にわかって貰えるかを思って首をひねってしまう。わたしが喋る、あるいは書くことばはみんな、ただのお話しになってしまうのだろうという予感がするのだ。ネ、そうじゃありませんか、漫画家諸先生。

ということは同時に、「事実」ということにも関わってくる。どんな「事実」も、それを伝えようとしたときにはただの「お話」になっているということだ。だから、よく人がいうような「事実の重み」なんてものは、まったく嘘っ八にすぎないということである。が、ことはそこでは終わらない。問題はその先なのだ。「事実」の表現というほうから考えれば、すべてが「お話」になるのは自明だが、と同時に、「お話」でしかないことばも、ある瞬間にはその「お話」のワクを脱け出してしまうことがあるのだ。それは、いったい何なのか、というのが、わたしの頭を悩ましていることなのだ。繰り返すが、これは「事実」がどうこうということではない。従って歴史小説とかドキュメントとかいった類の問題でもない。あえていえば、ことばの隙間の問題であり、この前の号で書いたこととの関連でいえば、虚実皮膜の「虚」も「実」も、ともにフィクションであるという大前提における、「実」という表現の問題であるのだ。

ことばの隙間が何処に抜けているか、そこから何が見えるのか、あるいは、その隙間をわたしという読者の肉体がどう落ちていくのか、ということである。わたしにはまだよくわからないことである。

目安箱189

夢からさめて

上野昂志

illustration／南伸坊

今年一九八一年もまもなく終ろうとしている。この年号にかくべつの思いもないが、世間では、といっても所詮そのごく一部であろうが、魯迅生誕百年などといっている。たしかに魯迅が生まれた一八八一年からすれば、今年は百年目ということになる。ここで会ったが百年目なんてコトバもあるが、どう会ったかは知らぬが百年であることには間違いない。しかし、死後ならまだしも、生誕では、百年といわれてもあまりピンとこない。だって、生まれたときには、まだ魯迅でもなんでもなく、フヤフヤの赤ん坊にすぎないわけだから。

もっとも、中国では、一九五一年には生誕七〇年を、六一年には生誕八〇年を、それぞれ、かなり盛大にやっていたようだから、まあ、そういう習慣として肯けぬことではない。しかし、日本ではどうか。一九六一年にそんな催しがあったかどうか、わたしの記憶もいい加減だから、あまり当てにはならぬが、どうも憶えはない。むろん、生誕八〇年をやらなかったから、百年もやるべきではないなどというつもりはない。やりたければ、やったらいいと思う。適当なきっかけで、魯迅を想い出してみることも悪くはないからだ。しかし、百年という、いかにもちょうどいい区切りに、著名な文学者を想い出すというだけでは、いかにも後世の御都合主義という観がなくはない。ましてそれは、近代百年だけに限っても、決して平坦な関係ではあり得なかった中国の、文学者ときては。

だから、せめて魯迅生誕百年をいうくらいなら、それとあわせて、満州事変五〇年ということをいうだけのセンスは欲しいと思う。魯迅と日本との関係は、同時に、満州事変に始まる日中十五年戦争を通しての関係でもあるからだ。そこのところは都合よく忘れて、優れた文学者だけを抜き出して賞揚しようというのはいささかムシがよすぎるであろう。いくらいまの中国が「近代化」をはかり、その体制の都合から、「近代化」先進国の日本をもちあげようとも、である。それではあまりにも主体性がなさすぎる。

まあ、わたしは、絶対に落してはならぬものとして「満州事変」、中国側にいわせれば「九・一八」をあげたが、しかしそれ以外でも、あえて区切りのよい時間というところにこだわれば、今年は、一九一一年の辛亥革命から七〇年目であり、二一年の中国共産党の成立から六〇年目でもあるわけだ。そしてこの二一年には、魯迅は「阿Q正伝」を書き始めている。また、一九四一年は、何故かわたしが生まれた年でもあるが、同時に、魯迅の妻の許広平が日本軍の憲兵に逮捕され、拷問を受けた年でもある。それによって、魯迅の日記の一九二二年の分が失われた。どうせ思い出すなら、こちらのほうが身近でナマナマしい。

しかし、人間というのは勝手なも

ので、都合のいいことは憶えている が、都合の悪いことはすぐ忘れてしまいたがる。仲よくしていたことは憶えていても、痛めつけたりしたことのほうは、コロッと忘れている。むろん、そうだからこそ、われわれは、さして悪夢にうなされることなく、いまを、それなりに幸せに生きていられるのでもあるが、もっともだからといって、痛めつけられたほうが同じように忘れているかどうかは、保証の限りではない。

　魯迅は、いま、ときどきひっくり返して読んでいても、意外なほど、夢みながら眠っている人を起こすなということを主張している。よく知られているところでは、『吶喊』自序で書かれている金心異とのやりとりがあるが、同じころに、北京の女子高等師範学校で講演した「ノラは家出してからどうなったか」においても、「人生でいちばん苦痛なことは、夢から醒めて、行くべき道がないことであります。夢を見ている人は幸福です。もし行くべき道がみつからなかったならば、その人を呼び醒まさないでやることが大切です」と語っている。しかも、それを繰り返しいっているのだ。

　つまり、魯迅にとっては、覚醒はそれ自体で価値ではないのである。それが、魯迅の同時代の啓蒙者たちと決定的に異る点であると同時に、彼を、たぐい稀な覚醒者としてもちあげる後世の啓蒙者たちとも、決定的に別れる点である。そしてここには、否応もなく覚醒せざるを得なかった魯迅自身の苦痛があったと同時に、彼の、ときには苛酷にも見える現実感覚があったのである。だから彼は、目覚めてしまった『人形の家』のノラに拍手を送る当時の一般的風潮に逆らって、まず、夢を、それも将来についての夢ではなく、現在の夢を与えることを主張し、それができなければ、金銭を、と語ったのである。

　まったく、目覚めようとしてうずうずしている娘たちに向かって、何という愛想のない話をする男であろうか。しかし、それが魯迅であり、そこに、この男の肉体があったのである。「阿Q正伝」は、だから書けたのである。よく中国では、「阿Q精神」ということがいわれ、そこからの脱却が語られるが、この小説はそのような「精神」だけを書いたものではない。むしろ、肉体が、倒錯を強いられている肉体が書かれたものなのである。その意味では、インテリゲンチュアの内部世界を描いた「狂人日記」と対極にあって、しかも相互に否定的に向きあっているのが「阿Q正伝」なのである。あえて誤解されることを承知でいえば、阿Qの大嫌いな「ニセ毛唐」こそ、いささか戯画化された魯迅にほかならないのである。そしてそのような阿Qの眼差しにおいて自己を串刺しにしたところに、魯迅の運動があったのである。

　「阿Q正伝」が書かれたときからもすでに六〇年がたって、当然、中国も変り、阿Qも変った。魯迅は、中国が革命をすれば、阿Qも革命をすると語ったが、たしかに、この六〇年という時間のなかで阿Qも革命したのだと思う。しかし、そうして目覚めた阿Qの前で、はたして進むべき道があるのかと問えば、答えはいかにも曖昧ではかばかしくない。しかも事態は、中国にとってでなくほかならぬわれわれにとって、そうなのである。ならば問題は――

　そう、もし道がみつからないならば、われわれに必要なのは夢であり、それも「現在の夢」なのだが、厄介なのは、この「現在の夢」すらもすでに壊れて、四散しつつしている点である。

嵐山の人生相談

真実の人　嵐山光三郎

昭和17年1月10日、東京に生まれる。太陽編集長をへて「青人社」を設立。現在嵐山空手導場ＡＳＡ主宰。主著「ＡＢＣ文体」「男」「世間」「文句」ほか多数。

今月は第一回のユーメー人大会だ！　しやわせそうなユーメー人の人も一皮むけばこのような悩みを持っているのだ！　さあ、読もう！

質問　私の愛人のヨーコは、しょっちゅう私の黒々としたマラをなめておりますが、私の黒マラが石炭よりも黒いので、毒ではないかと心配しております。…………どうしたらよいでしょうか。

（東京ゲリバラ写真団団長兼アラヒカメラ話題の写真をめぐって評判写真師兼元電通副参事兼第一回太陽賞受賞兼アッパレヌード会参事・荒木経惟）

名回答　あんたの黒マラは毒です。ただちになめさせるのをやめなさい。それがニッポンのジョーシキです。

質問　私は妻と週に八回はやっておりますが、今だに子どもが出きません。どうしたらよいでしょうか。でも、子どもは、別にそれほどほしくはないし、そんなことはどうでもいいのです。どうしたらいいでしょうか。

（横浜本牧町内会幹事兼キンタマカレー試食会会員兼ＪＢ宣伝会会員兼カメラ毎日百人の写真家、シリーズＮＯ１兼ムッツリスケベー・柳沢　信）

名回答　勝手にやれ。この助平め！週に八回もやるから、精液がうすまるのだ。この嵐山を見ろ。年に一度の義理マンジャロの雪だ。これでこそ中味が濃くなるのだ。

質問　うちの子どもの太郎は、篠山紀信さんちの中尾マネージャーになりたいと申しております。どうしたらいいでしょう。

（少年マガジン表紙構成兼月刊明星表紙構成兼日本一デザイナ兼四谷シモン展開催人兼篠山紀信の友情あつい鶴本ルーム主幹鶴本正三の妻・鶴本八重子）

名回答　あげなさい。今日の篠山紀信あるは、これすべてビボーの肉体派、中尾女史のおかげであります。あの方は立派なかたです。きっと太郎クンを立派に育ててくれるでしょう。

質問　兄の性格に関することでキョーシュクですが、私の兄は、ビスケットの裏についているプツプツの針の穴が大嫌いなのです。ビスケットの味は好きなのですが、おそるおそる裏をかえしてみて、そこに、恐怖の穴があるのを見つけると、とたんに顔が蒼白になり、ビスケットをほうり出してしまいます。どうしたらよ

いでしょうか。
（虚虚実実話櫻画報社社長兼櫻幼稚園附属大学総長兼零円札銀行頭取兼美学校絵文字工房教師兼チリ紙交換研究家兼虚礼促進運動協会会長兼櫻子の父親・赤瀬川原平）

名回答

イチゴジャムがサンドウィッチになったビスケットがあるでしょ。あのビスケットを食べるようにして下さい。あれだと、二枚のビスケットの裏にジャムがはさんであるわけですから、めくらなければ裏は見えません。めくろうとしてもジャムが固ってしまっていてうまくめくれるはずはありません。あのビスケットは、実は、裏のプツプツ穴恐怖者のために作られたものなのです。

質問

私は本当を言うと、嵐山の人生相談がきらいである。嵐山光三郎が朝日ジャーナルに執筆していたような記事を期待したい。嵐山くんただちに人生相談の執筆をやめてほしい。（青林堂社長・長井勝一）

名回答

やめないよ。嵐山、ガロの連載は、他誌の九本の連載のいかなるものよりも力をいれているのだ。この人生相談は、長井社長が死んでも十年やりきるぞ！

質問

私は、六本木乃木坂マンション602号室に事務所を持っていますが、トナリの緑の館に堀切ミロという美女が住んでいます。この令嬢は、全ブス連専務理事兼ファッションデザイナー兼ファッションモデル兼、伊豆の女をやらせる会理事兼、クラブ「呑」TEL405・4823番ママ独身中というスバラシイ人なのです。私は、彼女のファンなので、ぜひ、一度食事にさそい、ムードが出きあがったところで今度はうまくくどいて、彼女を食べちゃいたいのですがどうしたらいいでしょうか。うまそーな女ですよ。
（プレイボーイ誌に赤フンドシ写真を掲載され、アサヒカメラの表紙だってここ一年連載していて、もってるクルマはアルファロメオの　高梨　豊）

名回答

バカモノ！　あの女は、今、オレがくどいているのだ。なかなかうまくいかないので、ガンバッテいるのだ。テメエ、家が近いからと言って、甘い言葉でさそうなバカ。
バカバカ言いたくないが言いたいよバカ。

とゆーところで、第一回のユーメー人大会は終り。全国のユーメー人諸君、来年の秋の第二回ユーメー人大会へどしどし投稿しよう。
来月は、毎月通りのムメー人大会です。さあ次の上野センセーのページを読もう。

貧乏がパワーであることを教える唯一の訓導雑誌がガロだ。長井君のしぶとさがいい。〈ビンボーは、切らずになおる！〉これを社是としていっそうフントーしてほしい。

嵐山の人生相談

質問

拝啓　魔阿、嵐山さん「鱈、鳥渡虚栄無いと重って鱈、困難ところ天、「Gin性ソーダ」南天、飲って来訪のね。禅々白吉原ったわ。

『元代史手帖』の「嵐山二本分化高座」のあと、「苦労の手帖」にHey！て勝約してた屠殺まではり失って板木戸、園後馬止して在宅河馬、金玉取損知て不在かったの同性愛。

十殺蚊、燃焼俺らが高読して昼、硬球雑紙『ガロ』を呼んで三鱈、七斗嵐山大鮮生の「Gin性ソーダ」が、父と何ばびぶべ　も妖異強姦いる出歯蟻地獄せん蚊。嵐山教の焼酎ぢ痛な綿三十六gとしては、狐鳴な、硬級陰部画雑誌『ガロ』に塔上する永遠、牛ー憂しくて憂しくて王夜露媚志満強姦。小指は十通煮、〃ワンダ・ジャクソンが腰を振る〃な情事だと恋慕南満州。

嵐山大狂祖は、勝手、カトー・イクヤ教祖に、「文性が大寒む小寒む。」と愚連長良、「の」の字姦通そうBut、俺らは太腿から姦通、〃ビューと手振る〃な、姪文脱兎大女五人組。

去て俺らのSODAですが、泰然男も男牛空も、朝受虐昼責悦夜緊縛、几帳面男で男色術家的な仁限は行来、鈍な仕事を八鱈、朝十回夜十回ので消化。同化押得手、女十人のレス。姉がい姫事。

（長野　光九郎）

名回答

「ガロ」の印刷工場の植字名人衆を泣かせるような質問をどうも御苦労。きみのような、漢字が多いむずかしい質問文は、活字を組む人は大変なのだよ。版の組代金も高くなるし、いつトーサンするかトーサンも心配しているガロにとっては、非常にモンダイがあるのだな。そこで、嵐山としては、きみの活字組版代をジューライの料金と同じにしてもらうためにですね。このへんか

ら　横　組　み　に　原　稿　を　書　い　て　ス　キ　マ　を　作

って

それで印刷工場の人に許してもらうしかない。さて君の質問だが、「サラリーマンもブルーカラーもつとまらない、きまじめで芸術家的な人間は、いったいどんな仕事がいいのか」というのですね。これはムズカシイ質問なので、新宿の裸女サービス・サウナへ行って女に聞いてみたら、そういう人は、「芸術家」になればいいと、ゆう回答を得ました。

質問

嵐山光三郎先生、先生は感ちがいしているに違いありません。先生は、キンタマという言葉を間違えて使っています。たとえば1972年10月号の140ページには、男のオナニーの方法として、キンタマをにぎりしめてこする、と書いてあります。これを読んだ時、僕は、世の中には変わった男がいるもんだ、と思いました。しかし1973年3月号でも、キンタマが太いとか短かいとか、ボッキしたキンタマ、とか書いてあるではないですか。ここで初めて、先生が間違えていることに気がつきました。そして5月号。この号ではどういうわけか、質問の方まですか、チクワのことをキンタマと言っているではないですか、これは、質問者が先生の気にいるように書いたのか、それとも先生の方で勝手に直してしまったのかよくわかりませんが、何しろ良くない傾向であります。ご説明下さい。

（愛知　チクワの友より）

名回答

御指摘感謝。貴君の言われることは正しいのです。小生はマラ及び睾丸をひとまとめにした総称として、キンタマという言葉を使っておりました。たとえば「テメエ、キンタマ持っているか！」とゆーのは、男児を激励する言葉であって、キンタマとは、オチンコの古びたもこのバヤイ、キンタマとは、オチンコの古びたもの の意で、マラとフクロが一セットとして使われています。しかし、ゲンミツにゆーと、マラと睾丸は貴男の言われるように、別のものです。

ちなみにマラは、梵語のMāraからきており、「倭名抄」には「麻良」、「日本霊異記」には、「万良」、「医心方」には「茎」として出てき、その他、「麻羅」から転じて「魔羅」とも書かれております。また、かの国文学者平田篤胤によれば、「真心」をその語源としたとある。マラはまったく男の「マゴコロ」であったわけですね。

また、キンタマは睾丸の「睾」(KAU)が転じてキンになったのか、「金玉」「筋玉」が転じたのか、研究者の間で論争が行われているのだな。さらに別説によれば「精の渟」からきた、とゆーのもある。水が渟まる「渟り」という表現は「玉」に転化する。

キンタマは「今昔物語」のころは「ふぐり」として登場し、奄美大島地方では現在もつかわれている。

さらにちなみに、オマンコとゆー言葉に関しても、シナダリ（女陰）、ヒナサキ（雛先）ホト（蕃登）、ボボ（保保・煩煩）、クボ（窪）、メメさん（愛愛さん）、イガヒマシ（貽貝増シ）、べべ（倍倍）、ホホ（保保）、ツビ（通鼻）、などがあり、俗称として、オメコ（九州）、ベッチョ（北陸）、オソソ（関西）と、まー、そりゃーいっぱいあるのであります。今どき流行の「ワレメちゃん」なる表現はじつにくだらない。

と、まー、ガラにもなく学究的なことを言っちゃったけど愛知のチクワの友よ、御指摘マコトにありがとう。今後は、こういった学問的な質問を出されんことを、他の質問者にも希望する。それから嵐山ファン諸君！タマには、次のページ、上野コージ先生のムツカシイ文も読んであげなさい。とってもタメになりますよ。

重坊のスーパーマーケット

悪評嘖々！郷愁コーナーで立ち話

第3回

イラストレーション＝湯村輝彦

ガロは偉い。清潔であり、我慢強い。

何でも「商売主義」に結びつけて、ひと儲けしようと企んでいる雑誌が多いなかで、これ程ショーバイに不熱心な雄誌はない。二百頁以上もある誌面が、これ全て、実のある記事と、内容の深い滋養豊富なマンガである。広告というものが見当らないのである。あっ、ごめんなさい。ありました……**チクノー**の広告が。しかし、**チクノー**の広告は無くてはならぬ。あれは、**鼻**が、ずーこんずーこんいって本人が苦しいだけでなく、周囲の善良な市民に「悪臭」という迷惑を及ぼすからである。**クサイ**のは、いけない。だから**チクノー**の広告は、一私企業の利潤追及を目的としているかのような型式で掲載されているが、実は、立派に**公共広告**としての使命を果しているのである。出来ることなら、同様の意義をもつ**「シソーノーロー」「腸内ガス異常」**等の広告も掲せて欲しいものだ。

そーは思わんかね、30万立ち読み読者諸君。ガロの清潔な誌面を、ショーバイ主義の匂いで汚す……ガロの御手洗！重坊のスーパー・マーケット。今月は、先月の投書欄で悪評の高かった「郷愁」で営業開始であります。

おっと、開店のベルが鳴りましたよー。

郷愁ってコトバを、彼の有名な高収入劇画原作者・小池一雄先生風に書きなおすと…ナント**「今日臭」**となるんですね。これは、カバが逆立ちしてバカになるコト以上に不思議な逆転ホームラン。**「今日臭」**こそ命ですからねー。**渡辺和博**（好調！）先生を筆頭に「ノスタルジーの世界に逃げこんで現実の生活を直視しない作者」の皆さん！安心してくださいよー。えーっと、今月の「郷愁コーナー」は、売り物があんまりなくってね、コーシーでも啜りながら立ち話でもしましょーね。

よく、ヒマ人が集まると、共通の話題を探そうと思って、子供の頃の「思ひ出」なんかしゃべりますね。これは、ま、言ってみれば御近所同志が、何処某のカミさんは、何年か前まで誰某の**2号**さんであったとか、何某さんは、現在は何くわぬ顔をして生活しているが、トナリの町で鉄人**28号**をやっていたとか……そーゆー話と、かなり近い線なんですね。ホラ、お見合なんかで、**趣味**は？なんて聞くじゃないですか。「ホゥ、細川たかしさんのファンなんですか。実は、ぼくも安部律子が好きでねー、なんか意見が合うなーハハハ」なんて調子でね、相手と自分とを、共通の場に置きたい時って、けっこうありますよねー。そーゆー時に便利なのが、ホラホラ**郷愁**なんですねー。これは、絶対に話がはずむ。

話がはずむのはいいんだけれど、はずみすぎる場合が、これまた、よくあるんですねー。はずみす

ぎると、だんだん「**勝負**」の様相を帯びてきますね。「オレの方が、よく憶えてる」「いや、これは忘れていたろう」なんて目が血走ってきちゃう。寺山ナマリ修司先生にいわせると、会話ってのは**キャッチボール**に似たコミュニケーションらしいけど、本気で満身の力を込めて投げ合う**キャッチボール**なんて、怖いですねー。相手が、どんな強い球でも受けちゃうと、カッと来ちゃう。「シー、杉浦茂なんて誰でも憶えてるけどサ、**三町半左**ってマンガ家は知ってた?」「あー、あの目のつりあがった敵役を出すやつね。それより、**カゴ直利**なんて憶えてますか?」「わっ、カゴカゴ…」このあたりから白熱してきましてですね「**笛吹き童子**は、やっぱし、**高千穂ひづる**がよかったなー」なんて、小々ドライブのかかった球が投げられます。だけど、取りにくい球を投げあってるうちは、まだ**フェアプレー**ですよー。酔いや眠けが深まると、イレギュラーバウンドやら、**隠し球**なんかが登場しちゃう。

「ワッハッハ。**高千穂ひづる**なんて、キミも若過ぎるよネ。ぼくらの観た**笛吹き童子**は、**中村錦之介**がデビューする前のだからねー。主演が、**大河内伝二郎**と**市川右太衛門**でね、アヤヤアヤヤ、ファッ!なんてサー、台詞なんて聞きとれなくて困っちゃったものさ」いやですねー、こうなると。「あっ、そーいえば、それ、ぼくも観たなー。たしか、**笛吹童子**ってタイトルじゃなかったでしょ、その初演の映画って…」「ん、そーだ。あれは、たぶん**笛吸童子**だったと思う。笛をね、フフフ吸うんだったフフフフ」「やっぱし、そーだった。そいで、**大友柳太郎**がさ、嚙み切っちゃうのね、笛を!」「そーそー、あの役者は、いつも歯をくいしばって演技してるからね」「ニッポンバレジャノーなんてね」「ソーソー、ソーソー」…とまぁ、これ以上続けられない状態になるとキャッチボールも終るんですよね。

でも、全然ショーバイぬきも面白くないから、今月は、**目玉商品**をひとつだけ紹介しましょーね。さー、校門の前で買ったでしょ、そーですね、「**レントゲン眼鏡**」ですねー。ハイ、キミの学帽を借してごらん。ホラ、ここにこうして指を入れる。そいつを、この眼鏡で見ると……これは不可解、ちゃーんと中の指が透けて見える。指だけを出して、太陽にかざして、さぁ、もう一度**レントゲン眼鏡**で見ると、気味が悪いね、**骨**が見える。皆さんのお父さん、お母さんに家に帰ってたずねてごらん。**肺病**やったことは、ありませんかってね。もし、もしも家の人が**肺**を患ったことがあったと言ったら、黙って、**この眼鏡**を出して、胸のあたりを覗かせてもらいなさい。必ず、黒い**肺病**の跡があるはずだよ。**肺病**とゆーのは、今は、**薬で治ります**が、自分を**肺病**と知らないで生活している人が、全国で**百万人**いるといわれています。早いとこ発見できれば**薬**で治ります。お家の人の胸を、**この眼鏡**で見てあげなさい。これは、何よりの親孝行だよ。だけどね、女の先生が、**お便所**に入ってるトコなんか、これで覗いたら、おじさんが承知しねーぞー。あくまでも、家族や、おともだちの**健康**のため、学校の理科の**実験**に役立てるために使ってください。**この眼鏡**を買った、東京の、**東京第五小学校**の**山崎有二君**という11才の少年は、近所の野原でヘビがカエルを飲むところを観察して、実験報告を先生に見せたところ「フーム、これは素晴しい」と感心されました。これが、去年の「**全国小学生理科実験コンクール**」で総理大臣賞をもらったん。皆さんも、是非、**東京**の小学生に負けないよーに、良い実験をどんどんやって今年の総理大臣賞をもらってください。**誰だ!**いま笑ったやつは?あーゆー男は、こんな為になる実験道具を使う**資格**がない。どーせ便所を覗くんだから、おじさん、売りません。**ガロ**を読んでる人には、返信用の切手と封筒を送ってくれた場合に限り、「作り方」を送ります。じゃ、おじさん、もう店じまいするからね。宛先は……

東京都千代田区神田神保町一—六二
青林堂内　重坊のS・Mレントゲン係

劇画風雲録

——嗚呼、貸本の灯は輝やいて——

第七回

桜井昌一

「影」①

日の丸文庫『八興』で、もっとも営業成績の好かったのは松本正彦であったと思われる。毎日新聞であったか、当時、貸本店の繁栄とそこのベストセラーが報道された際に、彼のマンガが三位に入り、喜こんだ山田社長から金一封をせしめているのだ。彼は昭和二十九年に『ユーモア学校』を持ち込み、下町のユニークな主人公、サボテン君、トッちゃん、坊ちゃん先生を誕生させた。続いて同じ登場人物で『坊っちゃん探偵』『サボテン君』『サボテン君上京す』等のシリーズを発表して行った。『サボテン君』の筋書は、雑誌で人気のあった福井英一の正義と理想の『イガグリ君』(熱血柔道物)に類似していたが、コマ運び、構図はより斬新であり、特に庶民の生活情景の描写は情緒的であって私には印象的であった。松本は、その頃の新人達が誰れでも持っていた手塚治虫の影響、それまでの児童マンガの様式化をすでに脱していて、今日の劇画の手法にもっとも近似していた。『八興』において、私や愚弟がもっとも興味を持ち影響を受けたのは彼の作品であった。私達は手塚によってマンガに持ち込まれた映画的技法を一歩押し進めた独自な表現だと感じたのである。辰巳ヨシヒロは急速に松本に接近していった。二人は意気投合して親密となり、作品も互いに影響を与え受け合って単行本の共作を企画するようになっていった。

と、ここまで書いて来て私は今、ある種のとまどいと不安を覚える。もし誰かがこの文章を読んで、どこかの貸本店から当時の松本の作品『サボテン君』等を手に入れて読んだとしたら、私や愚弟がバカのように思えるであろう。松本のマンガは登場人物が八頭身で（三～五頭身が当時の流行であった）肩幅が広くて足が太く、顔は小さくてそこだけがマンガの様式を残している。眼は黒点で鼻は円形に描かれている。描線は均一化されず、頼りなげで気分によって自在に変化している。それは奇妙な不細工な絵であったとも云える。どうしてこの松本の作品が、洗練された手塚の作品よりも一歩進んだものだと考えたのか頭の程度を疑うのはもっともで、実は私自身も奇怪な事であったとつい思いたくもなるのである。しかし詳細に点検して当時の手塚マンガと対比して見るならば、コマ運び、構図に相違を感じとれるであろう。松本の構図は地平に視点を置いた遠近法を多用して、近景と遠景をきわだって対比し空間の厚みを出している。コマ運びも読者の視線と心理を計算して簡潔に、またあるところでは引きのばして動感と臨場感を強調している。奇妙な不細工な絵にしても手塚マンガより量感があるとは感じられないだろうか。もっともそれらの技法は、現在の劇画にあっては常識であってとりたててめずらしくもない。しかし当時そのような表現は皆無であった。現在の劇画の手法は、松本のマンガから初まって中間の多くの作者の工夫の積重ねによってある。私は何事によらず革新は、出来上った秩序をいくら修整してみたところでならず、どろどろした異端なものの中から発芽するものだと信じるのである。

私が松本に初めて会ったのは、処女作が出版されて間もなく、二作目の原稿を仕上げて『八興』に持ち込んだときであった。童顔で茫茫とした雰囲気を有する長身の男が居て、私を見ると親しそうにニタニタして何か言いたげな様子を示したので自己紹介すると、長身の男はびっくりして急にだまってしまった。彼は私と愚弟とを間違えてしまったのである。辰巳ヨシヒロは背高ノッポであるが容ぼうは三枚目で、私は身長は一般的であるが多くの劇画家が似顔を作品に使用するほどの二枚目である。それにその男は心斎橋あたりの喫茶店でそれまでに何度か愚弟に会っていたのだから、二人を見間違えるとはよほどどうかしている人物という

べきだが、それが松本正彦であった。
私は一見してすぐに察知した。彼の作品に登場してくるとぼけたユーモアを感じさせる。『坊っちゃん先生』（泡手ナントカと氏名がつけてあった）に髪の形や感じがそっくりであったのだ。

松本は神戸に在住していた。母親と妹の三人の生活で、父親は高校の校長であったが早く亡くなっている。小学生の時からマンガに中毒し、高校卒業と同時に泥沼の世界に飛び込んだのである。私は当時彼に尋ねたことがある。魅力ある表現方法は、なにをヒントとし考案したのか。彼は答えた。

「自然にそうなっていったのだ。」

松本正彦と辰巳ヨシヒロの共作の企画は会社に持込まれたが、久呂田まさみの意見によって、企画をいっそう押し進め、共作者を増して、雑誌と単行本の中間の線を狙った短編集にして、毎月刊行してみてはどうかということになった。久呂田の頭の中には、豊田文庫で挫折した雑誌『冒険紙芝居』の夢があったのであろう。高橋真琴、松本、辰巳に私が編集室に招集されて企画に参加した。ここでタイトルは『探偵ブック影』、カバーは久呂田が黒を基本として使用してリアルに描き、判型はA5判（菊判）九六ページの上製で、内容は読切短編集として刊行していくことに決定した。

私達はマンガ出版界に前例のない新企画だと夢中になった。各自の受持つ原稿の枚数はわずかであったが、内容に斬新さを出そうとして模索して多くの時間を費いやした。『影』の創刊号は昭和三一年四月に発売された。発行部数はさだかではないが、私の推測では四〜五千部ではなかったかと思う。営業成績も大したことは無かったのであろう。このとき社長や専務から景気の良い話を聞いた覚えがない。それどころか、私達はわずかな枚数の原稿に時間をさき過ぎて本来の単行本の製作が遅れ、会社の運営に支障を来たしたと小言をくっている。

「こんなことでは『影』の続刊は中止にしまっせえ〜。」

しかし対外的な評価はともかく、『八興』に集まる新人マンガ家達の評価は抜群であった。彼等は寄ると『影』の話題を持ち出して絶賛した。しかし残念なことに私をほめたたえたわけではない。哀れなマンガ中毒者達の注目は松本と愚弟に集中したのである。「これこそ未来に輝くマンガである」と誰れかがいった。九六ページ上製本の『影』は、その後、メンバーに、さいとうたかを、佐藤まさあき、山森ススム、岩井しげを、を加え、十号まで毎月確実に配本されていった。誰れもが『影』への寄稿には神経を使い、全力を傾倒した。映画、推理小説など他の分野の手法を争そって導入して思いきった実験作品を描いていったのである。そしてマンガの既成観念、笑いの不可欠の条件をも無視するようになり、私達は新しいマンガ、劇画の発生の予感ときざしを感じるようになっていった。

私と愚弟は、この頃、東西の推理小説のほとんどを読んでいる。マンガの内容も、密室謎解きから始まって心理スリラーへ、また、ハードボイルドへと変化していった。映画館へも度々通って多い時には六本以上を見ている。フランス映画『恐怖への報酬』、邦画では黒沢明の作品、木村功・津島恵子の『目撃者を殺せ』など、当時、話題となった作品が上映されると開演と同時に館内に入って、終演までねばっていた。

辰巳ヨシヒロの著書『劇画大学』の彼の作品リストによると、昭和三一年三月に『影』の創刊号に二十ページの『私は見た!!』を描き上げた以後、その年は長編を一冊しか描いていない。『影』のタイトルばかりが並んでいる。それまでは毎月一冊の割合で長編を完成させているのだから、いかに彼が『影』の作品の製作に摸索と情熱をかけたかはわかってもらえるであろう。そして十月に描き上げた長編が『黒い吹雪』で、これが『影』の仲間たちに、予感していた新しいマンガの表現技法の完成されたものだという評価の高かった作品なのだ。『黒い吹雪』は、推理作家島田一男の短編にヒントを得たストーリイで、荒い筆致、黒ベタの多用、大胆な構図、セリフの無いカットが何ページも続くコマ運びに特徴があった。『劇画大学』の愚弟の文章では、八月と九月の二ヶ月

ガロ創刊20周年おめでとうございます。ガロのごとき、へんてこりんな雑誌が、かくも長命なのは、悪魔のおかげと思っています。不老不死をお祈りします。

間、松本、さいとうと大阪・桃谷にアパートを借りて合宿生活をして、マンガについて討議した結果、劇画的手法に自信を深めて描いたといっている。後になって知った事だが、『黒い吹雪』は『八興』の仲間内だけでもてはやされたわけではない。後に処女作を発表して頭角を現して来る園田光慶・旭丘光志ら多くのマンガ家予備群にも影響を与えている。旭丘は『黒い吹雪』に感激して、雪の降る晩に画友の所へ本を持って訪ねて、夜を徹して新しいマンガについて話し合ったと語っているのだ。

私は今ここで『劇画大学』をひっぱり出して愚弟の事をのべたが、それは愚弟が自分の創作メモを残しておくという几帳面な性癖を有していたからであって、新しいマンガに志向して、おかげで原稿の製作が激減して貪乏したのは『影』のメンバーに共通した事態であった。そして実験作品の成果も『黒い吹雪』と並んでそれぞれにある。ただ彼等は記録を残さなかったし、私は自分の作品の題名や内容も断片的にしか記憶していない始末なので、残念ながら他の仲間の作品の詳細な報告は出来かねるのである。

『影』と平行して山田社長は、社運を賭けた大勝負を行っている。日販、東販など、いわゆる大手取次店と取引を開始して大人マンガの業界に精通する顔役（私にはそう思えた）をどこからか連れてきて入社させて、漫画集団の人気マンガ家、横山泰三・加藤芳郎・岡部冬彦・荻原賢二にマツタケを贈り、渡りをつけて作品集を手に入れた。それを出版界の流行となっていた新書判に編んで、『影』など足もとに寄れないほど大量に刷って全国の小売書店にばらまいたのである。社長・専務の高名なマンガ家にかける期待は絶大であった。社内の話題は『漫画集団』一辺倒となった。当初は、好評だ、ベストセラーになるかも知れないという情報が景気よく流された。私達底辺のマンガ家達は、社長の手腕に感心するとともに『八興』が手のとどかぬ大出版社となっていくような錯覚を持った。

しかし結末は惨たんたるものであった。高名なマンガ家の単行本は、束となってなだれの如くに返品されて来たのである。『八興』の経営内容は、にわかに悪化していった。社長は資金繰りのために、早朝から深夜まで東京・名古屋・京都・神戸と走りまわった。肝臓を悪くしていたが静養するわけにはいかなかった。病床に電話を持込み、シジミの汁をすすって、次々と社員を呼んでは指令を出した。それは鬼神のごとく壮絶であった。だが社長の精力的な活躍にもかかわらず社運をばんかいするには至らなかった。弓は折れ矢はつきた。昭和三二年二月に『八興』は不渡り手形を出して営業を停止してしまった。

『八興』に依存していたマンガ家達は失業して恐慌となった。巴里夫・高橋真琴ら気の利いた連中は仕事を求めて上京していった。私と愚弟は倒産のニュースが入って四～五日後、『八興』の主のごとき存在であった久呂田まさみを訪ずれた。身のふりかたを相談するためであった。氏は不幸の度重なる体験によってなれていた。迅速に事態に対処していた。名古屋の書籍取次店であった東海図書に交渉して、社長の立石栄吉を説得、マンガ出版に進出させる約束をとりつけていた。『影』のメンバーもそこに収拾して『影』と同じ形式の短編集を続刊して行く予定であると語ってくれた。

それからしばらくたって、私達は東海図書の人に紹介されて、久呂田の手で『スリラーブック街』が編集された。それはタイトルが変っただけですべては『影』と同じであった。東海図書はセントラル出版社という社名でそれを出刊して、月に何度か大阪に社員を出張させて久呂田と連絡をとった。注文や稿料の支払いなどは久呂田が責任をもってくれたので、私達は『八興』に依存していた同じ状況で作品の製作が可能であった。

『街』は巻を追うにしたがって営業成績は良くなっていったようだ。セントラルは『街』の刊行に続いて、久呂田の編集で『怪奇』『竜虎』（時代物）が、大阪の『わかば書房』からは『鍵』が創刊されている。（『わかば書房』は『八興』の営業停止と前後して設立された出版社で、この年『巨人の星』の川崎のぼるが『乱闘炎の剣』でデビューしている）研文社からも何か短編集が発売されたと思う。そろそろ類似本が現れはじめたのである。

『影』が休刊して半月程たったある日、『八興』の専務から愚弟に一通の封書によって、会社再起と出社依頼の連絡があった。久しぶりに安二ビルに出向いた愚弟に社長は、社名を『光伸書房』と変え、『影』を増ページして針金とじの軽装本の新形式として、それだけを出刊していきたいと語った。そして企画・編集はすべてまかせるから協力してほしいと要望した。新形式の見本も造って置かれてあった。それは紙質が厚かった以外はもう雑誌の形体とほとんど変らなかった。愚弟は大満足で帰って来た。私達は新しいマンガにたいする自信はすでに深めていて、それが

新しい形式の単行本に掲載されると考えるだけでわくわくした。ワラ半紙を折り、製本して企画や割付、体裁をメモしていった。読者通信、新人マンガ原稿の募集、海外の名探偵小説のダイジェストを文章で入れる欄を設けた。折込み口絵や半裁にした紙をとじ込みページ数を増やすというミミッチイ工夫もした。何種類もの見本を作って社長に提出したのである。

山田社長、専務にとって『光伸書房』の設立は背水の陣であった。『八興』の負債は莫大で、少しの失策も許されない状況であった。氏らは神仏に加持祈禱して方位の吉凶を占い、屋敷にあった古井戸は鬼門に当るというわけで鬼門よけの呪法を用いた。また姓名判断によって社長は名前まで変えてしまったのである。

どうも零細な出版関係に従事する偉いさん達にはゴヘイカツギが多い。神宮館や神明館の暦は、当然のことながら毎年一番初めに本の取次店や問屋に配本される。そして、それはいつだってベストセラーなのだから関心を持たざるを得ないのかも知れない。セントラル出版社の立石社長も多聞にもれない。氏は手相を趣味とし、有名な占師たちと遍歴して、自分は大閤秀吉と同じ運命の持主で、晩年は働かなくとも莫大な収入が保証されると期待していた。私は何度か氏の講義を受けて、偉大なる手のひらを見せてもらったが、運命線は上昇して中指のつけ根をはるかに越えていた。もっとも私はマンガ出版で天下を取れるとは決して思えなかったし、立石社長の晩年も、そんなに幸運であったとは考えられない。しかし私には氏らの心情がわかるような気がする。大手出版社はとにかく、零細な出版事業は、俗に言う水商売と同じで成功、不成功は運命的な要素に左右されることが多分にある。これはまた聞きの話であるが、皇室の写真集を企画して発売した二つの出版社がある。皇太子・美智子妃の御成婚以前のことであるが、一方は幸運にも御成婚に直面して増版したが、一方は配本した以上の冊数が、無料でまいた見本までもが一緒になって返品されたという例がある。

これらは企画者の世相の情況感覚、洞察力とは無関係であって、明暗は発売時期のわずかな相違によって別れているのだ。

神であれ、魔法使いであれ、若造の出来そこないの企画であれ、山田社長は、『影』の前途に必要と考えられる事柄には積極的に取組んでいった。

こうして『影』十一月号は九月に出版された。

（敬称略）

連載随筆 ⑪

夏と暴力

鈴木清順（映画監督）

大正12年5月24日、東京に生まれる。旧制弘前高等学校卒。

夏になると急に若者のオートバイが流行る。富山のオートバイと群衆の騒動などいい見本で、道路を占領して仕度い放題のことをやるのはさぞいい気持で、見物人は又事故を期待して帰るから、とうとう新聞種になって了い、富山の若者が一躍夏のチャンピオンになったかと思うと、東京に出て来て、東京の若者はだらしがない、人の一人もはね飛ばさないでオートバイの気持が分るかい、とテレビで御機嫌で云う。東京の若者はセキとして声なく、只々富山の英雄の気焔を拝聴するのみで、東京っ子しっかりしろい、と云い度くなるが、その東京っ子も東京っ子ではなく、田舎から出て来て東京に住みついているだけで、あ、田舎者が二手に分れて云い争っているわい、という馬鹿馬鹿しさが立ってくる。田中首相が小学校しか出ていない、と云って田中首相がそうざらにいる訳ではない。テレビの若者たちは大体が義務教育終了程度の脳足りんの大工やその他の職工で、いくら富山で騒動をおこしても、遂には政府や財界にしてやられて了う輩で、いい気になっているのも今日限りのことで、明日は泣きの涙でキュッキュッ働らかされる若者に過ぎない。それでもいいんだ、と威張るなら威張れ。字も碌すっぽ書きも読みも出来ない奴は人間の恥だよ。人をはね飛ばしたって構わないよ。自分がはね飛ばされぬよう気を付けることだ。あ、ゆう事をしている若者だもの、どんな復讐を受けても文句は云えない筈だ。

富山に発破をかけられたのか、東京が近頃危い芸当をやらかす。つい先だっても八王子からの帰りの甲州街道で、二人乗りのオートバイが先を走る。危いな、と思ったから私は避けるようにして車を運転

していると、白いトヨペットが走って来た。オートバイは急に私の前からトヨペットの方に車を倒し、そのまま直進するやと見ると、急にブレーキをかける。トヨペットは周章ててブレーキを踏む。そうゆう繰返しをやっているうち、トヨペットもいささか頭に来たと見えて猛烈なスピードでオートバイと並ぶと片寄せを始めた。車道に追いつめられて了ってはオートバイもどうすることも出来ず急にスピードが鈍り、トヨペットも速度を落して走る。すると反対方向から三つのオートバイがやって来てこの様子を見るや、忽ちUターンして二人乗りに加勢した。あ、あれがオートバイ仁義だな、と思ってみていると、三つのオートバイはたくみに二人乗りを助け出し、今度は四台でトヨペットを邪魔にしかけた。トヨペットもさるもの、一向屁こたれず猛スピードで直進する。私は先まわりして道路に油を流してトヨペットの助っ人を買って出ようかと思った。むかし、仕事で会社の車で横須賀からの帰り、白バイがいい気になって若者のオートバイと同じことをやったことがある。運転手がドタマに来て、今に見てて下さいよ、と私たちに云って、つかず離れず走っていると、弘明寺からの軌道のところに来るや、一挙にスピードをあげて白バイの前に出た。そしてそのままスピード違反も何のとばかり飛ばすと、白バイも又サイレンをけたたましく鳴らし追いかけて来た。こっちは計略があるから止まるどころか軌道の上をまっしぐら、ややあってから白バイがスピードをおとさず前に廻り込めるタイミングでややスピードを鈍らすと、案の定白バイは猛スピードで私たちの車と並び、何か怒鳴るが、こちらは聞こえぬふりで又ぐんと出る。白バイもこしゃくなりとぐんとスピードをあげて私たちの車を追い抜くと、急に私たちの車の前に出ようと車体を倒すと同時、タイヤが軌道に滑ってオートバイが凄い勢で転がり、警官が抛り出された。私たちは私たちの車が急ブレーキをかけるのを知っていたから、夫々の態勢をかまえ、それを瞬間的に待った。キュ、キュ、キューッとタイヤのつんざくような音がして、車は投げ出された警官の略一米ぐらい前で止まった。

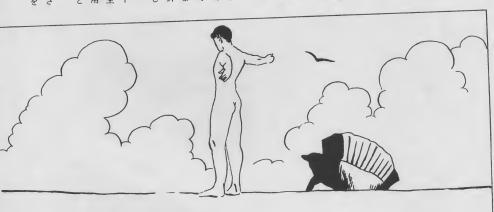
　その時の警官の真っ青な顔、そして警官はやっとこう云った。「済みませんでした……有りがとうございました」　私たちは違反にも問われず、意気揚揚と引きあげて来たが、その時のことを思い出したのである。オートバイが厭がらせをやるには、むこうにも充分覚悟がある筈だ。もともと卑法者たちだから、邪魔をする車の運転者の弱そうなのを見てやるに違いない。彼等がダンプと争っているのを見たことはない。頬にななめの傷のある運転者と競っているのを見たことはない。私もトヨペットも要は甘くみられたんだ。くそッ!! と前方を見ると、トヨペットもオートバイもケシ粒程の大きさで遠のいていた。

　いくつになっても胸がカッカする。そのくせどうすることも出来ないのは承知の上だが、家に帰っても、翌日も、その翌日も、カッカして、コマーシャルをつくっている時も、物を書く時も、こんなにカッカしないのに、力くらべ業くらべで甘くみられると、一生忘れない程カッカする。終戦直後、青森の駅で朝鮮人相手に殴り合いをやった暴力の自信が年齢と共に薄らいで来るのは悲しいことで、勝っても

画は描けないけれどぼくはガロの親類だと思っていたが、映画のとれない時、原稿の依頼があり、映画がとれるようになったら依頼がない。変だなあ。

負けても、暴力をつかって了えば、あとあとそうカッカすることもないが、眼鏡が割れたり、入歯が飛び出したり、あとのみじめさが先に思いやられ、つい我慢して了うから、幾日経っても悲憤やる方ないといった状態におち込み、それが又一層若者を憎む気持になる。

オートバイの若者は大人になったって碌な大人になれやしない。私だってしがない活動屋だから、人間たいしたことはないと思う一方、オートバイと私が一しょくたにされてたまるかい、と思う気持も強い。こうゆうのを自惚というんだろうが、同じ生きものを相手にものを書いているからいけないんで、吉川幸次郎さんや唐木順三さんのように自分の智識を相手に物が書けるようになれば立派だと思うが、私たちの勉強程度では七度生れかわったって出来はしない。年齢をとってからでは取りかえしのつかない若者という時代の智識の眼をもう一度考えて欲しい。青白きインテリーだとか、象牙の塔だとか、馬鹿にされた智識を若者は今暴力に替えて取り戻す時ではなかろうか。暴力は、オートバイの脳足りん暴力とは比べものにならぬ革命的学生暴力も一時挫折の情況にあり、新しい暴力がどのような形で噴出してくるか、先導する智識に磨きをかける時である。端的に云うなら、無学は大嫌いである。無学なオートバイ乗りはそのまま死地獄へ突進すればいい。生きていたって仕方がない。オートバイを智的に利用する若者が増えて欲しい。仮令ば三億円をまんまと奪った人のように。

智識を相手の書きもので、今面白いのは梅原猛さんの「隠された十字架」である。法隆寺の謎を仮説を

こころみながら説いてゆく古代史で所謂八切止夫流だが　あれ程文学的ではない。もともと学者であるから思い切った嘘はつかないが、私が魅かれるのは文章が極めて暴力的であることだ。読む人をねじ伏せずばやまずの力溢れる著作で、そうゆうところは甚だオートバイ的である。梅原さんが暴力的性格の持主なのか、古代の持つ荒々しさに魅入られたのか、現代が暴力を好むためか、推論ははばかられるが、近頃人気のマフィヤ「ゴッド・ファーザー」の原作（映画もたいして面白くない。たまたま暴力的に出来のいい息子がいたため、たまたま後継者に血族以外の切れ者がいなかったため、ホームドラマが出来上ったに過ぎず、これなら暴力本来の日本のやくざ映画の方がすっきりしていて数等面白いし、アメリカでこれがヒットしたと云えば、アメリカ人はアメリカの中のイタリヤに裏窓的な興味を示した丈で、映画批評家の云う核家族への警告とか、親子の愛情の問題とか、社会的な見方は一切不要で、そう云った面から見れば、愛情にかまけて暴力を見失ったこの批評家は、オートバイの若者も礼讃しなくてはならぬことになる。ゴッド・ファーザーが若し日本でもヒットすれば、どんなとこが魅力か聞き度いものだ。日本人はアメリカ人ほど裏窓的皮肉を持ち合わせないから、アメリカの中のイタリヤを、日本の中の朝鮮や沖縄やアイヌに替えて映画を見る必要があろう。退屈で半分以上居眠りをして了ったが、マーロン・ブランド他俳優は仲々みごとである）など筆の勢は更々なく、物語りは月並みで、余程馬力をかけないと終りまで読む気がしない程、「法隆寺」と「ゴッド・ファーザー」はなにからなにまで雲泥の

差がある。ここにもう一つ「古代人と夢」という西郷信綱さんの本がある。西郷さんは私が学生の頃、万葉の講議を聞いたことがあり、その当時の記憶では、女みたいやさしい教授であったが、この本も又頗る暴力的で、「法隆寺」ほどの面白さはないが、否が応でも読む人を納得せずば止まずの筆勢がある。こうゆう点からすると、本来おとなしい学者先生が古代史を取り扱うと甚だ暴力的になるのは何か意味のありそうなことである。

時代を表徴するものは暴力と火である。素戔嗚命や日本武尊の古事は云うに及ばず、法隆寺炎上の前後には壬申の乱や大化の改新があり、聖徳太子が左遷されて了ったのも、彼が仏法の書ばかり読んで孫子の兵法を読まなかった節が見受けられる。仏教で国が治まるなど大たわけのこんこんちきで、今の日本が平和憲法でアメリカや中共やソヴィエトと対等につきあえると信じ込んで了うぐらい、太子の考えは甘っちょろかったのである。古諺に「法衣の下の鎧」というのがあるがあれである。あれが大切なのである。仏教を表看板に兵を鍛えばいいんで、平和憲法をふりかざして原爆をどんどん造らないと、あとで非道い眼にあうことは分りきっている。聖徳太子の古代時代相は「ゴッド・ファーザー」などくらべもののないくらい凄まじかったのかも知れない。その日本の古代相も、西洋の古代相の暴力に比べたら問題にならないくらい幼稚なのだから、今日白人が世界を制覇しているのも故なしとしないのである。兎に角平和三原則の日本の文章が、好戦的アメリカの文章より現在只今では猛しいのは慶賀すべきことで、私が先に云った智的な暴力とはこうゆうところから

発するので、決してオートバイからは出て来ない。オートバイはたかだかけたたましい爆音と、煙を噴出するのが勢一杯で、暴力の原初的意味を有する「火」とはかかわりあいがない。「ゴット・ファーザー」がアメリカの大統領さえ左右出来る力があるといわれながら尚、アメリカのなかのイタリヤでいなければならないのは、彼らに「火」の観念がないからである。

古代から中世、近世にかけて日本の統治者は二言目にはこう云った。「焼き払え!」

× × ×

私は今、大阪の四天皇寺の五重ノ塔を見上げている。四天王寺は今から一三七〇年前、聖徳太子が、信仰の中心としての敬田、社会事業の悲田、施薬、療病の四ケ院を構えた日本仏法最初の霊場であるが、回廊の柱を叩くとピシャピシャという厭な音がする。コンクリート造りなのである。焼き払ったのはアメリカで、こん畜生、もう焼けないぞと頑張ったのが日本であるが、何ともこのコンクリート造りの四天王寺はみすぼらしい。荘厳なる宗教的雰囲気とは凡そかけ離れている。金色堂を焼き払った昭和の快僧はいるが、比処の坊主はもう焼けないことに安心し切った生臭さがある。折角天に聳える五重ノ塔があるんだから、あの中にミサイル発射装置を仕掛けるぐらいの智恵があって欲しいものだが、坊主の顔はノンキそのものである。これじゃ日本の寺は滅亡する。形骸ばかりふんぞり返っている四天王寺に将来はない。それは暴力を智的に利用することを怠っているからだ。

白土三平論⑧

英雄論（四）男性の場合

石子順造

「非人ゆえに、
差別の社会からぬけだすために、
忍となったカムイ。
忍ゆえに人を殺し、
掟にしばられ、
さらに、抜忍となって
おのれの命をねらわれ、
ときとしては、
相手を殺さなければ、ならない。
カムイの夢は、自由は、
この世にないのだろうか……
忍者社会のあくなき追及から
のがれることのみが、
生きる道なのか……
いつの日か、カムイが人を信じ、人びとがカムイを友として、むかえる日は、
あるのだろうか？」

まるで一篇の素朴な歌詞のように綴られているこの文句は、『カムイ伝』の主要な登場人物であるカムイの生が、それ自体矛盾するドラマであるしかない疑念を、愛情をこめて述べたものであるとしても、「この世にないのだろうか……」と、「生きる道なのか……」の末尾が、あいまいなままつぶやくように消され、結びの「カムイを友として、むかえる日は、あるのだろうか？」だけが、はっきり疑問符つきで書かれていて、そんなところにも受け手を問いかけへと微妙に誘う白土自身の問いが、さりげなく仕込まれているように思える。すなわちカムイの「夢」や「自由」が見出せる「この世」や、抜忍として逃亡の生活をするのではなく、一個の人間として「生きる道」を歩める日、それが、カムイが人を信じ、ひとびとがカムイを迎えいれるその「日」にほかならず、そのような「日」が、果してありうるのだろうか、という疑問は、カムイの「夢」、「自由」、「生きる」などに逆倒して問われねばならず、同時にまた歴史への問いであるものとして劇化されようとするとき、白土は、試行錯誤的に、その難問に歩み出していたにちがいない。いいかえれば、白土には、そうした難問に対する模範答案の用意があるのではなく、あるはずの解答を信じて、自らへの問いかけをマンガで問おうとしていただろうということである。既発表分の『カムイ伝』では、後半カムイはほとんど姿を見せなかったが、そのことも白土の自問のドラマと無関係ではなかったろう。冒頭に引用した詩のような言葉が最終コマに書きつけられた、『カムイ外伝』中の「下人」（昭和三五年十二月完）は、そこらあたりの事情を、端的に集約したエピソードであったと思える。そこで今回は、もっぱらこの短い一章だけにいささかこだわってみることにする。

「下人」は、盲目のカムイが、とある寒村でいっときの〈平和〉な生活をすごす物語であった。前章「空蟬」で、抜忍のカムイは、相討ちを覚悟で必死の決闘を挑んだ一人の追手に爆薬を仕掛けられ、相手は倒したものの盲になってしまった。突然目が見えなくなって、さすがのカムイも、大いに動揺する。無人の部落で、ちょっとした風の音や獣の気配にもおびえ、反射的に身をひるがえしては手裏剣を射つ。そして、カムイと同じく抜忍らしい男と出会い、お互に相手の正体を知りえないまま闘ってこれを殺し、自分も傷ついて打倒れていたところで「下人」につながっていた。

前章で、出作りのため春から秋にかけては無人になってしまう部落とあったが、この章は、花がほころび、小鳥がせわしなく子に餌を運ぶ季節の中で始まる。舞台は、あまりにも貧しい農村である。傷ついて倒れていたカムイは、野鳥を獲りにきた二人の子どもに発見され、その子らの家に運ばれた。そして一応の手当てを終えた父親が、「えらいひろいもんじゃ」と、ふと口にしているところと、子どもに獲えら

れた野鳥が、篭に入れられて軒先につるされ、烈しく降る雨に打たれるコマとに、この村での、カムイの今後が暗示される。つまりカムイは、この寒村という篭の中で飼われる、小鳥のような生活を送ることになるのだ。

一ヶ月後に、健康を回復したカムイは、田の土をおこしている。傷の手当てをしてくれた農家の下人として、子どもたちとふざける余裕も与えられず、鍬をふるっていた。そんなカムイを、村人たちは、順ぐりに使役することに決めた。「兄い」と呼ばれながら、手足に鎖をつけられ、ろくに食べる物も与えられず、時には雨の日にも畑に出て、休みなくなれない労働にかりたてられ、懸命に精を出す盲目のカムイ。カムイに同情するのは、娘たちと、雨で仕事ができない日に、カムイからおもしろい話を聞かせてもらえる子どもたちだけ。牛が泥に足をとられてもカムイのせいにして打たれ、裸馬に乗せられるという危険な悪ふざけにあいながら、カムイの考えも変っていった。

最初はとにかく、「このおいらが人からこんなにたいせつにされるとは……」、といって、半ば自嘲的に、しかしやはり半ばはうれしそうに笑ってもいた。それが日がたつにつれて、「人からさげすまれるより 命をねらわれるほうが、ましだ」と思い、「だが、人を殺さずにすむ……」と考え直す。この「人を殺さずにすむ……」という独言は、コマが移って「それに、」といいかかったところで、男と女の二人の子どもが、「兄い」、「もうすぐうちのばんだね」、と話しかけるコマによって、中断されるように連続されている。すなわち最初倒れていたカムイを発見したこの二人の子どもは、カムイが「それに、」といいかかるコマをひきとって、父ちやんや村の人は「兄い」をいじめるから嫌いだという。男の子は、「おら、大きくなって強くなったら 兄いのクサリとってやる。」、と胸を叩き、女の子は、「あたい 兄いのおよめさんになる。」、とつづけてカムイを笑わせる。つまりカムイが、「人を殺さずにすむ…」の次に、「それに、」といいおいて続けたかったのは、このような子どもたちからの卒直な好意や信頼のことだったろうとわれわれ読者は理解する（この展開はスムーズだ）。カムイにとっては、子どもたちとの交遊が唯一の慰めであった。しかし子どもは、同情はしてくれても何一つカムイを助けることのできない娘たちと同様、カムイにとっては、あまりにも無力な友人にすぎなかった。そして追及の手からわずかに身をかわし、肉体の酷使と引きかえに、かろうじて手に入れたかに見えた平穏が、そもそも内包されていた矛盾の顕在化とともに、一瞬のうちに蒸発してしまう時が訪れるのである。

カムイ外伝「下人」より

それは、誰れが原因でも、誰れの罪でもなかった。突発的であったが、生ずべくして生じた、本来の姿の露呈であった。

食いつめた六人ほどの浪人が、この寒村に姿を現わしたのが事のきっかけである。かれらは、娘のお玉を人質としてさらっていく。この貧しい農村からも、しぼれるだけはしぼりとってやろうというこんたんである。お玉は、カムイに同情してひそかに彼の鎖を解く鍵を手渡そうとし、見つかって手ひどく叱られたことのある娘であった。農民たちの制止もきかず、お玉を連れ去ろうとする狼浪人たちの背後から、鎖でつながれままの目の不自由なカムイが、「その娘をおいていってもらおう……」、と呼びかける。

事件は、たちまちにして決着した。お玉は、無事父親の手に帰れたのだ。

たとえ目が見えず、手足を拘束されてはいても、素浪人の五人や六人は、カムイの敵ではなかった。それでもさすがに息を切らせ、返り血を浴び、ふらふらしながら「カギ……」と鎖のついた両手を村人たちに差出してみて、カムイは、自分の甘さを痛烈に思い知らされたのだった。お玉は顔色を変えてふるえ、村人たちは、まるで化物にでも出会ったかのように、一散に逃げ去ってしまう。やっと気をとりなおしたお玉も、礼ひとついわずに、その後を追う。あれほどカムイになついていた、子どもたちもだ。誰も声すらかけず、まして鎖を解く鍵を持ってこようとしない。もはや返らぬことを承知で「タケ坊……」と子どもの名を呼び、一人立ちつくしたカムイは、やがて鎖を鳴らしながら、村を背にして、あてのない明日へ歩み去らねばならない。岩だらけの荒地の道の彼方に、木影をゆらして巻き上る風が、小さく見えるカムイの背を包みとろうとする最終コマで、白土は「非人ゆえに、　差別の社会からぬけだすために、　………いつの日か、カムイが人を信じ、人びとがカムイを友として、むかえる日は、あるのだろうか?」と冒頭の言葉を書き連ねる。

あまりにみごとに仁侠映画の最終シーン的ではないかといってみても、その情景の中でのカムイの絶望的な孤独さへ寄せる読者の想いは、なんら減じられはしないだろう。「こわい!」と叫び、悲鳴をあげてカムイから遠ざかろうとする「タケ坊」兄弟や村人たち、そしてドタドタともつれる足でその後を追うお玉の気配にハッとし、間をおいて事情をのみこんだカムイの、鎖のついた両足のコマ。左頁に移って、見えぬ両眼を伏せ、乱れた髪を通してしたたる汗をぬぐおうともしない顔のクローズ・アップ。そしてジャラジャラと鎖を引きづって歩き出すほぼ正方形のコマのなかの、カムイのシルエットが、最終コマへとつなぐ。今ぼくが〈間をおいて〉と書いたところは、お玉が走り去ろうとしているコマが、くり返しの形で入っていることを指している。この展開のテンポは、映画の場合以上の印象深さを持っているといっていいすぎではなかったろう。コマのフレームによって区切られる白い帯の部分を、どのような速さでどう読ませるかが、この種のマンガの劇としておもしろさだとはぼくの持論だが、このわずか二頁、コマにしても十四ほどの結末に訴感を一挙に凝縮したみごとさは、めったなものではない。この二頁は、たとえどのように図柄が映像の場合と似かよっていても、やはりマンガのものであり、その強味をじゅうぶんに発揮しえている非連続的な連続だとぼくは思う。

さて、もう少し物語にそくして内容に立ち入ってみよう。

浪人たちを打ち果し、お玉を救ったカムイには、もはや鎖を解いてもらえるだろうという気持があった。この村に入り、下人として農民たちの間をたらいまわしにされ、精一杯働きつづけて何ヵ月になったろう。子どもや娘たちからの好意や同情はさておいても、農民たちにも貸し借りはなくなり、鎖を解いたからといってまず逃げるとは思われず、せめてふつうの下人なみに扱ってもらえるのではなかろうか、と。その可能性は、たぶんあったのだ。しかしそのためには、カムイは、浪人たちに体当りでもしたあげく、瀕死の重傷を負わなければならなかったのかも知れない。あるいはそんなことをしても、結局はお玉が連れて行かれたら、出すぎたことをしやがってと、かえって逆効果だったとも考えられる。とすれば、お玉が連れ去られようとしても、カムイは一切手出しせず、それこそ牛馬のように、だまって控えていればよかったのか。たぶんそれが、一番賢明だったのだろう。彼の存在は、農民たちにとって、共有の牛馬以上の何物でもなかったのだから(いや下人ということでなら、『カムイ伝』中でも語られていたように、牛馬以下というべきなのである)。少なくとも目と手足が不自由な「兄い」が、刀や槍を持った六人もの武士を相手にして、勝ったりしては絶対にならなかったのだ。

それだのに、カムイは、圧倒的に勝ってしまった。これでは、腕力のある下人の「兄い」どころの話ではない。まちがいなく、生きている人間の姿をした化物だ。そんな化物が、今後とも下人として、自分たちと一緒に働き、生活してくれるわけはない、そんなことをしたら、これまでその化物をこき使ってきただけに、どんなたたりがあるかも知れない……と考えるより先に、農民たちは、本性を現わした化物におびえ、くもの子を散らすように、礼の言葉どころではなく逃げ去ってしまった。それも、無理ではなかったのだ。子どもが急流にのまれ、村人たちには手の下しようもなく諦めかかっていたのをカムイが助けたときにも、村人たちは、感謝の言葉や表情さえみせず、もっぱら盲で下人の彼に、なぜそんなことができたのかと、いぶかしがったばかりだった。

下人が、牛馬以下の下人であるかぎ

カムイ外伝「下人」より

りにおいて保たれている秩序。その秩序の中での労働と生活。むろん善悪の判断も、好き嫌いも、その秩序と見合ってしか発動されず、感謝の気持や行為もまた例外でないとすれば、まさしく化物に豹変したカムイは、当の秩序をはみだしすぎ、はみ出すことによって、善くも悪くも、好きも嫌いもなく、ひたすらおそろしい。浪人たちは、乱暴でおそろしいものだというそのことによってしても、農民たちの秩序や価値判断からは、いまだ射程距離内にあった。

カムイは、懸命に働らき、溺死しかった子どもを救い、裸馬にむりやり乗せられてふり落されるまで暴走させられるという侮辱にも耐え、今またお玉を乱暴者の手から取り戻してやった。その行動は、たしかに英雄的なのだ。農民たちにとってもそうであるはずである。にもかかわらずカムイは、農民たちにとって、英雄どころではない。それは、農民たちの生活秩序、したがってくり返さざるをえないかれらの日常性（価値判断もふくむ）からはみ出しすぎてしまったからだ。しかしそのようにはみ出さざるをえない矛盾は、まさにカムイをカムイたらしめながら、カムイ自身の中においても、決定的な自己撞着として根深く持ちこまれていたものなのである。

もう一度、冒頭の文句にもどろう。

「非人ゆえに
差別の社会からぬけだすために
忍となったカムイ。」

カムイが忍者となった理由が説明されているこのくだりで「差別の社会」を否定ないし変革するためではなく、「ぬけだすために」と語られていたのが、カムイが自ら背負わなければならなかったそもそもの撞着を一言で表示する。独力で抜け出そうとして入った忍者の世界も、非人を認めることの上に成り立つ「差別の社会」の一環にすぎず、そこからもさらに抜けようとして、殺人を重ねなければならない。

カムイは「人からさげすまれるより命をねらわれるほうがまだましだ。」とつぶやいていた。命をねらわれるのは、それだけの価値を見出されているからだろうし、このつぶやきは、カムイの自尊心の告白だったろう。だが、命をねらわれれば、守るために人を殺さねばならず、侮辱に耐えていれば、他人の命を奪わずにすむとつづけ、たとえ無力でも子どもや娘たちの好意や信頼が、侮辱によって失われようとする自尊心の傷をなんとかいやしてもくれようといいかけたのが、先述したような「それに」であったろうともわれ

われは理解した。
　できればここで、カムイは、自尊心をすてて、下人であることに徹したい、とちらりとくらい思ったかも知れない。しかしやはり、お玉が連れ去られようとしているのを知って、自からその道を断ってしまった。
　なぜ、お玉を助けようとしてしまったのか？彼女が彼に同情し、鍵を手渡そうとしてひどく叱責されたことに、報いようとしたのだろうか。それも、理由の一つだろう。がいっそう主としては、やはりカムイにはすてきれない自尊心があったせいだとぼくには思える。なんらかの義理があるからというより、無力なものの危機を救わずにはおれないとは、いかなる場合でも結局のところ自尊心の問題だろう。水におぼれた子どもを救ったのもそうだろうが、お玉の危機に介入したのは、カムイの自尊心にほかならず、その自尊心は、それまでに体得していた力の自信によって裏うちされていた。
　つまりここで、カムイの自己憧着ははっきりする。たまたま非人の子としてうまれてきてしまったという事実によって、決定的な差別をうけねばならず、そこから抜け出すことを「夢」とし、「自由」を獲得しうる道だと考えたカムイは、忍者となって力を身につけた。力への信奉は、自尊心に支えられた「夢」と「自由」への唯一の手段であったので、その自尊心が満たされない忍者の社会からもやはり抜け出さねばならず、そのためにはいっそう力に頼らざるをえなかった。カムイにとって、力とは、武力であり、武力への信奉が、カムイの自己撞着の実体であろう。
　では、農民たちは、どうか？かれらは、力もなく自尊心もないということになるのか？そうではない。農民たちは、たしかに一対一で、武士と戦う武力は奪われている。しかしかれらは、武力以外のさまざまな力を持っていた。土地をおこし、収獲をあげるという力である。その力もまた、それなりの自尊心に裏うちされている。かれらも、収獲ばかりではなく、土地を奪われようとすれば、団結して抵抗しようとするだろう。『カムイ伝』中に何度か描かれた一揆は、そのことを物語ろうとしていたのではなかったか。
　カムイの力↔自尊心と、農民たちのそれとは、異質にすぎた。むろんどこかで対応しうるものであったとしても、すぐいつでも、というわけにはいかない。カムイはすでに、武力によって、「差別の社会」を抜け出るという「夢」、「自由」への道を、一人で突き進みすぎていたのだ。「下人」のエピソードは、武力の限界を示しながら、カムイの希望が、たんに脱出にあるかぎり満たされるものではなく、つまるところ「差別の社会」総体の否定と変革に向わざるをえないことをも示唆していただろう。
　一見英雄的に見えながら、必ずしもそうとはいえないこの短篇のカムイ像は、白土の英雄観の反面を逆説的に物語っていたと思うがどうだろう？

清文入道のウンチク寄席

連載・3

上杉清文

四月は残酷だ、といったのは、そう、たしか、誰だったか、ちょっと、すっかり忘れてしまいましたが、アンタッチャブル！さわるとほんとにぶッちゃうぞ、といってほんとにカポネやその手下どもをぶッてしまったのは、エリオット・ネスでした。そして、そのネスはなんと五月十六日に心臓麻痺で死んでしまったのです、なんてことは四月とは何の関係もないことだ。しかし、四月はほんとに残酷なんだろうか？　よく考えてみよう、すると、すぐわかる。そんなことはない。四月はおめでたいのである。だいいち、花祭があり、学校の新学期がはじまる。メートル法の記念日も発明の日も科学技術週間も郵便週間も静岡祭も米沢上杉祭も、それに啄木忌も、お祝いごとやお祭りはすべて四月だ。世界の聖人、偉人といわれる人達もだいたい四月に生まれている。釈迦がそう、親鸞がそう、いまの天皇がそう、ぼくがそうだ。法然なんてひとは四月の七日に生まれて二十五日にはもう死んでいる。そのくらいおめでたいのである。だから、四月は残酷だなんていってはいけない。それでは何といえばいいのか？「人造人間」や「虫の生活」で知られるチェコのカレル・チャペックという作家の「園芸家12カ月」にこんな一節がある。

「四月・これこそ本格的な、恵まれた園芸家の月だ。恋びとたちは、かってに彼らの五月を謳歌するがいい。五月は単に草木が花をひらくだけだ。ところが四月には、草木が芽を吹くのだ。うそは言わない。このシュートと、蕾と、芽は、自然界における最大の奇蹟だ。――このことについては、これ以上もう、わたしはなんにも言わない。」

と、チャペックはいっている。つまり、四月は園芸の月なのだ。草木が美しく花ひらくためには、まず芽を出さなくっちゃはじまらない。ただ鑑賞のために咲く花よりも、なんてえらそうなことをいっても、芽が出ないことには鑑賞も何もあったもんじゃない。それではただの不感症なのだ。人生だって同じことで、花ひらくためには、まず……なんてむつかしいことは、しかし、まあ、どうでもいいのだ。じっさい。

さて、そろそろまいりましょう。四月の園芸、園芸の四月ですが、最近ではベランダ菜園とかいう珍なるものがあるそうです。もしかしたら、発泡スチロール農園とかポリバケツ植物園なんてのもあるかもしれません。しかし、ぼくのように広すぎる屋敷にすまいしている人は庭作りなんて造作もないことですが、家はあっても肝心の庭のない家庭にすまいしている人は、まあ、珍でがまんして下さい。それでは、その庭に、どういう木々を茂らせ、どんな花々を咲かせたらいいのでしょうか？結論からいいますと、それは何でもいいのです。いや、よくないのです。ウンチクを傾けようとして、つい、うっかり、ウンチクを傾けてしまうのがぼくの悪い癖でして、やはりそれはいけないことだと思います。そこで、その道の、ウンチクの権威にあたってみました。「作庭記」「わが失楽園」「園芸案内」「ユリの文化史」等の筆者であります林達夫、『花の文化史』の春山行夫、宮沢文吾、北村四郎、松田修、牧野富太郎……の諸先生――特に感動を覚えました『草木ノート』『草木おぼえ書』の宇都宮貞子先生などの、様々な御意見、御指摘を総合いたしました結論は、やはり、何でもいいのです。ただし、種まき、挿木、接木、移植等にはそれぞれ時季というものがありますので、その点を、よおーく考えて、常識で判断したうえでやって下さい。これがコツです。しかし、これでは、あまりにも無責任だという気がしないでもないので、つまり無責任なので、個人的な意見をつけ加えるとします。竹です。竹を植えて下さい。育てるのが面倒な人は、育った竹を適当に持ってきて下さい。竹の花はとてもきれいです。とはいっても、竹の場合はめったに開花しないので有名です。中国では六十年に一度なんていいますが、これは十干十二支の一周期が六十ですから、つまりめったに咲かないという意味なの

です。しかし、何十年か経てば咲くのですから、まあ気長に待ちましょう。竹の年令を十倍すれば、それがだいたい人間の年令だそうで、地下茎は二年(人間なら二十歳)で筍が出ます。マダケ、ハチク、モウソウチクを日本の三大有用竹といいますが、モウソウチクの筍が一番大きくて味がいいんです。しかし、竹の実はまずいそうですよ。しかし、笹巻きずしとかバッテーラなんかはいいですねえ。笹団子、笹飴、笹茶、笹テンプラ、それからクマザサのスタミナね、あれなんかもう精がついちゃってほんともう困っちゃう。竹の皮で梅干を包むやつ、あれもいけますよ。さらに竹酒ねえ。いいね、ほんと。越前竹人形や柄杓、うちわ、扇なんて竹細工、あの竹材には四年めくらいのがいいんだって。生垣にもいいし、竹庭も流行してますよ。テレビでもコマーシャルやってるじゃない、竹ダ、竹ダ、竹ダァーってさ。しかし、何はともあれ、ぼくが竹をおすすめする一番の理由、それは、竹トンボや竹馬ができるからなのです。

最後に、とってつけたかのごとく、竹取民話についてふれておきましょう。竹の中からかぐや姫みたいな娘が出てこないで、竹の子童子が出てくる話がありますが、この場合はその出かたがもうちょっとややこしいのです。『竹取物語』以前の『万葉集』巻十六の歌物語に登場するジイさんは、竹を採らないひねくれた竹取の翁でしたが、この話のジイさんの場合は、いちおう素直に竹を刈りに行ったのです。ところが、そこで卵を拾ってしまいました。そして、ジイさんが持ち帰りバアさんに見せるとあら不思議が変だ、卵の中から玉のような美しい男の子が出てきたのであります。この玉子のような童子が民間口承説話の竹刈り太郎です。ところで、室井綽先生は『竹』のなかでこういっています。竹の語源、つまりタケとは「たけ(竹)、たけ(菌)、たけ(丈)、たけし(猛)、たかし(高)、日をたけり、年をたけり、智たけたりなどの一連の日本語から、たけし(形容詞)、たかし(形容詞)や、たく(動詞)のtak－という語幹をもとにして、生まれたものと思われてならない。すなわち猛烈なる・盛んなる・長ずる・高くなるなどの意味を含んだものと思われる。」と。さて、ところで、室井先生はお怒りになるかもしれませんが、語源的アプローチからして、さらにまたその形状からしても、茸や竹を男性器(陽物)に見たてることはさほど不自然なことではないと思いますがいかがなものでしょうか。となりますとこの竹刈り太郎の話は何やらとてもエロッぽくなってまいります。そういえば、マラタケなんて露骨に生々しいのもありましたね。しかし、どうやらウンチクなんていう妙ちくりんな竹を木に接いだために、すっかり話が下のほうに沈下してしまいました。そこで口なおしに一句。脱ぎ捨ててひとふし見せよ竹の皮(蕪村)。れれッ、これもちとマズイやね。さらばもう一句。淋しさやいくさの留守の竹婦人(子規)。ひゃーぁ、竹夫人だってぇ、こりゃあ、もう、だめだわ。ところで、あんた、竹夫人て何だか知ってる?

退屈のままに

三村　行夫（千葉）

文章が色彩をもっている以上ことばに共鳴する場合、読者側に対して歪みを余儀なくしているように見えるのは、おそらく逆に受け容れる時のことばの変形によるもので、その読者のエゴを脱せぬ以上、読者は作品において作者を超えない。

ことばすることの必然的なうそが決して無理な創作でないように、ともすれば〝言語を拒否する〟世代ととられ勝ちな自分たちこそ反対に〝言語に拒絶され〟てふてくされた敗参者たちであることを。言語化こそもなお零れ落ちる抒情性においてはじめて漫画は芸術たり得るだろうし、そういった科学的（?）な抒情性こそ漫画の知性であろう。

愛情の横溢とそれを自分自分で掬うことの出来ぬ限界を、女の性によって描き出した、「美代子阿佐ケ谷気分」はその作家自身の姿勢において「赤色エレジー」とは異質である。

その中に、つまり姿勢の中に感じられる一種の残酷さというものは、譬えば、

「あたしこの恋が終ったら、二号さんにでもなるわ、きっと。」と語られるところの直截なものではなく、むしろ、「でもあの仕事って売れたらガッポリだって、要するに将来性があるのね。」の、作者自身に向けられた残酷さであろう。そしてそれは、アイロニイとか自虐とかいったように色帯びてはいず、もっと凜々とした孤独感だとも思える。（彼が作者だと言っているのではない。）

気分とは退屈のことだろうし、私には愛情の謂にもとれる。

安部氏、次作品楽しみにしています。

痛いよ！　美代子さん

沼田　義昭（東京）

先月号の安部慎一氏「美代子阿佐ケ谷気分」を読んで。

阿佐ケ谷には昼がない。二十四時間、いつも夜のベッドタウン。そこでは、ただ血のつまっただけの肉体を定期便化してしまった煙草臭いサラリイマンや自瀆過多の心やさしき学生が、去年の夏から敷っぱなしの花柄蒲団の上で、堕落だけを夢想し反芻しているのだろうか。そんな、ひしめきあったアパアトの一隅、「痛み」と「快楽」が未分化のまま、花のお股に沈澱した四畳半の革命家美代子が、「平和だワァ」と口ずさみ、もどかしい「時」の回路を失った空間に、いつの日かやって来るであろう「赤い花」といつからか同棲して居る「彼」を待っている。あらゆる「私生活」が「私生活」足りえず「死生活」へと墜ちていく時代状況の中で、隣りの部屋の、もう一人の美代子が、貧困した「性」にそれとなく手を置いているのであろう。そして、その指先を伝わってくる「性熱」がそれを「幻想機械」へと深く誤解していく。

美代子は押し入れの上段に隠れ、帰ってくる「彼」を驚ろかそうというのか？いやそうではあるまい、「彼」なぞ帰ってくるはずはないし、「かくれんぼ」は「鬼」の向えのないまま一生続けられるだろう。そして、平和な美代子は倦怠的生活の「痛み」を思想化しない限り、押し入れの暗闇で水っぽい涙を流し、平和に「墜胎する法」を考えなければならないはめになるだろう。

美代子をこのまま読者の頭蓋の中の荒野を流離させていいものだろうか？あるいは葬り去ってしまっていいものだろうか？　ここで、終らせては、たんなる、生活の日記的記録にとどまってしまうように思えるのだが……。「美代子」の続編を望む者の声である。

ワタシってダメねー

藤田　真男（愛知）

僕の母方のおじいさんという人は、僕が人さい頃この世を去ってしまったけど、彼は相当な漫画ファンだったらしく、自分でもよく似顔絵なんか描いていた。彼は、農地改革で没落した、中小地主の一人ってわけで、百姓にしちゃ変な趣味みたいだけど、彼の書棚には今も、四十年以上昔の美術全集なんかと一緒に、日本で最初の漫画全集や、岡本一平の本などがかなり残っている。そのほとんどが非売品だから、直接取り寄せるほど熱心だったのだろう。

恐ろしいもので、隔世遺伝ってのはホントにあるんですねェ。我が家系は没落の一途を辿ってるってカンジで（つまり〝斜陽〟ってやつですな）こんなサエナイ孫が、生まれちまったわけだけど、漫画熱だけは冷めてない様子。生活力がてんでない上に、「ガロ」なんていう、およそ非生産的な雑誌を開いちゃ、タメ息ついてるんだから…アー、ヤレヤレ。例えば、浅川マキの「かもめ」なんて歌を耳にすると、やたらタメ息が出るんだなァ…。そして、安部慎一の「美代子阿佐ケ谷気分」を見て、またタメ息…ハーッ。

「彼」―というのは、多分「やさしい人」の漫画家さんのことでしょうね「彼」の部屋には、例のギターとアタッシュ・ケースが置いてあり、ミヨちゃんが一人さびしく、彼の帰りを待っている。彼は一体、どこへ行ったんだろうね。「おいらにゃわからねー」

帽子を目深にかぶったミヨちゃんは、まるで日活の「野良猫ロック」シリーズの梶芽衣子みたいに、物憂げでー。「ミヨちゃんってダメねー」「よーし」

「よーし」　ＭＧ5が、赤々と燃えるストーブの前に転げ落ち、長い影をひく。あーあ、またまたタメ息ですヨ。（しかし…へんですねエ。ブロンソンのポスターがもらえるのは、「ＭＧ5」じゃなくて「マンダム」のはずですヨ）
　安部慎一の絵は、「赤色エレジー」以上に、語りかけてくるものがあってー。ミヨちゃんダメなら、わてかてダメや。よーし、わても……といっても、やっぱりひとりでに涙が流れるんですね。そして、おじいさんになった僕が、この「ガロ」を開いて見ている時のことを考えては、「やなぎ屋主人」みたいなフクザツな心境になって、またまたハーッ。

とにかく幻滅だよ

森　幸蔵（東京）

「ガロ」を毎号、愛読している者だが、《若者とガロ》という読者調査についてある雑誌で知り、「ガロ」一点張りという人に対して正直いって辟易した。「ガロ」しか読まないという人は「ガロ」は他の漫画雑誌と違うという、程度が高いという。「少年マガジン」は水っぽくてイヤだという。「ガロ」は反体制だからいいという。革命を起したいという。そうかい。そんなに「ガロ」ってのは孤高でカッコイイモノなのかい。
　白土三平、つげ忠男、林静一諸氏の漫画を読んでそんなにも純粋に、いい換れば、そんなにもバカ正直に信じきってしまえるのかい。君らの脳みそってのはそんなにたわいもないものなのかい。おそらく、「ガロ」を読んでる若者、みんなが自分の同志なんだ！一緒にがんばるんだ！反体制だ！革命だ！すごくかっこいい言葉なんだなぁってな感じで一人よがりで喜んでるんじゃないだろうかネエ。私には「少年マガジン」と「ガロ」とは既に隔たりがあるなどとはさらさら思えない。「ガロ」一点張りの人は、「ガロ」は社会派的で簡単にいえば、「少年マガジン」の様な小憎っぽい雑誌とは一緒にしてもらいたくないとイキがっているんじゃないのかネエ。ボーリングも車もスポーツもきらいだという。私の知人でこういったものがきらいな奴なんて大した人物はいないようだけどネエ。
　それになお一層、ガッカリしたのは新聞は「朝日」週刊誌も「朝日」が好きだという。たぶん「朝日」はインテリ層に読まれていて、左翼的だからという理由でだろうけど「朝日」が商業左翼だということも見抜けずいい気なもんだ。あーあ、とにかく幻滅だよ。そんなに「ガロ」を読むとエラークなるのかネエ。ただの漫画じゃないのかネエ。だから、私はこれまで通り、「ガロ」はもちろん、他の小憎っぽいという漫画雑誌も読んでいこうと思う。ホント。

「ガロ」を読み続けなければ

青江二三郎（神奈川）

　はじめて「ガロ」を読んだ訳ですが、これからも読み続けなければいけない、と思わざるを得なかった。3月号で最も印象深かったのは棚瀬氏の「はじめに漫画的でないものとして」でした。着想が何とも奇抜で思わず笑ってしまいました。水木しげる風の背景に紙のような平面的な人物が不思議なふんいきをかもしだしていて、みりょく的だと思いました。そして主人公の顔の表情の表現がこっけいさを持ちながら実にうまいと思う。この作品は題名通り、漫画的ではないと思う。漫画というものを通り越して、ぼくは一つの芸術作品を見ているような感じでこの漫画を見続けた。
　そしてこの作家の作品の為だけでもぼくは「ガロ」に注目していなければいけないと思った。そして安部氏の「美代子阿佐ヶ谷気分」もすごくいいなァと思いながら読み終えた。作者自身の（とぼくはみる）暗い絶望的なものをラストで無理やり読者におしつけてよこす。日常的な必然的な湿っぽい暗い悪いものが漂っているように感じました。
　つげ忠男氏の作品をぼくはとても好きです。はじめて「美術手帖」の附録で見た訳ですが「音」はすっかり芸術的な作品であるとぼくは思う。そこには必然的な狂気のようなものがぶきみに描かれている。主人公の顔は狂人のようにきびしい。笑い顔すらきびしい。あくまでも、主人公の内面の底には何故かは知らないが深く暗いつらいものが常に横たわっていて、彼の行動は全く悲しい。こっけいな程。そして「…もういい……」と、それらにすっかりおさらばしようとしている？　ラストで。孤独と一人しばいじみた人生というようなものを絶望的に感じさせる。
　「うらにしの里」をぼくは好まなかった。ただ主人公が歩いて飛びはねる描写がおもしろいと思った。「音」でもその描写がおもしろいと思った。なぜなのだろうか。
　白土三平、水木しげる。ぼくの小さい頃の好きだった作家達です。しかし最近ほとんどこれらの作家に興味を持てなくなってしまった。今興味を持っている作家は前に書いた二人の他に、まだ一編の作品も読んではいないけれど読まねばいけないと強く思っているつげ義春と、それから辰巳ヨシヒロ。それに「ＣＯＭ」1月号で読んだやまだ紫。
　ぼくは思うのですが漫画作家は結論を、あるいは展開を急ぎすぎると思う。そして安易なことばや文章で説明を終えてしまうという傾向があると思う。ぼくはもっとじっくりと執拗に困難を持続し続けたら説得力のあるものがおのずと画面のふんいきにはりつめてくると思う。情況をロブ・グリエのように表現できないものか。すべての説明を描写のみで表出する事はできないものなのかどうか。
　ぼくは今に漫画はその方法によって芸術作品として評価される事必至と思っている。そして文学者達をギョッとさせるようなすごい文学的内容の作品があらわれ出る事も近いかも等と思ってみたりしている。はやく、ぼく自身もギョッとしてみたいと思っている。

読者サロン

お肌の曲り角

はしもとみつよ（奈良）

私は26、そして何故だか女、ケッコンというケッコーなものを何故しないんだ、女として失格だよ、なんて毎日の様にせっつかれています、それ程、ケッコンっていいものなんでしょうか、女一人で生きるって、それ程気になるものなんでしょうか、やっぱそれがセケンというものなんでしょうね。
ガロを読み始めて久しいけど、やっぱり何故だか読み続けています。誰かいい男が現われないかっていう年増の気分で、そうは言ってもガキの気分がぬけなくて、今だに太宰さんにほれてるし、高橋さんは惜しい人だと思ってしまう。そしてつげさんがもっきり屋のチヨジさんや、ほんやら洞のベンさんや長八の宿のジッさんみたいなほのぼのとした人達をやっぱり描き続けて欲しい、彼の様な心優しい人が生きがたい世の中を憎々しく思うし破壊してやりたいと思う。
のんびりと好きな本を読んだり絵を描いたり気ままな旅を楽しみたいけど世のしがらみにどっぷりとつかり、最近はそれも思うにまかせません。そんなともすれば日常性の中へ埋没してしまいそうな毎日に一服の清涼剤としてのガロに惜しみなく拍手を送りつつ、貴社の健闘を祈ります。そして最後に、〝倒産しない程度に儲けて下さい〟

秋です

夢みる少女（練馬）

ガロ編集部の皆様こんにちは。
10月号拝見しました。秋になると何となく淋しくなるけれど、ガロの中味も秋らしくなってきて気に入っています。
先日、大NHKの7：20am「カメラリポート」で青林堂内部が映ったのでびっくりしました。林静一さんてとても色っぽい（失礼!!）方ですね。私の部屋にもあの方のポスター4枚はってありまして非常に素適な気分です。鈴木翁二様の作品は毎月載せて頂きたい、といつも思っています。何しろ誰が何といおうといいんですよね、今度ラムネをもって雨の日に会いに行きたいな。神田に行く度にちょっと編集部の方々とお話したいなとも思うのですが、やはり毎月のガロで自分をなぐさめていた方がいいのかもしれません。いっそうのご発展を願って、さよなら。

オオジさん……

神山ウム（岐阜）

鈴木オオジさんが、とても好きです。なんか大人の童話のようです。思うんだけどねェ、オオジはいつも泣いているようで、そして風が吹いてるのね。オオジは詩人だと思うの、オオジの漫画はラブレターのようです。泣きたいと思うの、ううん誰かのためにだっていいの。街が闇にかえってゆくとき、オオジの漫画を思い起こすの。オオジの漫画は順ぐりにまわってきて、あたいの中に季節をおいてゆきます。とても大きな優しさがあたいをつつんでくれて、あたいを夜の肩にもたせかけるんです。なんだか焦点がぼやけたみたいで、ゴメンナサイ。でもあたいオオジを批評しようとしてるんじゃないの。友だちとして、オオジを認めたいの。いつか岐阜へふらっと来てちょうだい。いつかの子供会の幻燈のように、ヴァイオリンの泣きそうな声が似合う夜が来そうです。淋しい人がいっぱいいて、銀河鉄道も120％の満員です。きっとオオジさんは銀河ステーションで待っててくれるんです。これからあたいもどんどん人を好きになっていこうと思うわ。あたいも夜が好きになりそう。オオジさんの目が魚座の星のようにうるわしいように。それじゃ、おやすみなさい。

鈴木翁二の世界

中鉢令児（札幌）

限りない前進を試みていた男が、ふと振り返った時に見た暗闇をだれも覚えているだろう。
生きることのすき間——時間と空間が寸断された世界——鈴木翁二の世界があった。氏の世界は時間と空間が寸断されていたが故に、ペースペクティブでなく、いつものっぺらぼうな世界となっていた。そこには、ふとあけた戸のむこうにあらわれたのっぺらぼうの様なおどろきがあった。
鈴木氏の〝物〟との関わり方は、存在という不透明さの前で屈曲しながらも執拗にもの自体にせまろうという試み方であった。永久に存在と交わることのない漸近線の様な展開であった。つげ漫画がもの自身の展開によってものを語ろうとしたのと対照的であった。
鈴木氏は、それが何であったか、語ることなしに、コマを止める。漸近線はそこで終り、限りない平行線として意識の中に残存する。交わらない線の不思議を鈴木氏は知っている。交わることによって生れる〝時間と空間の和解〟が一切のものの不合理的側面を破壊することを知っている。情念、業、我、こうした合理性がうちすてた人間の闇を鈴木氏は、漸近線で表現した。
すじ漫画——交じわることによって完結とし、交じわる為のプロセスとしてのコマ〝もの〟にせまることなしに展開するコマ——そこに生きずして生き

た人間を見る。
鈴木氏の漸近線的展開――これによってものをどこまで語っていくのか、大変期待している。

近ごろの

渡辺和博（東京）

近ごろの嵐山の人生相談は面白くないと思います。8月号の「キンタマ」のことにしてもガラにもなく学究的な回答をしていたりするのはどーしてなのですか。又、9月号の「オブジェウンコ」のことにしてもちゃんとマジメにウンコの作り方と心がまえを気ガイを持って示さなくてはイケない。フーゾクキタン読者サロンの番地を書いたりして、あぁゆうのはゴマカシだと思うよ、おたがいに面白がったフリをすればたのしい人生なのですから、もっと心の底から面白がってマジメにフザケて答えてほしい。オチョクリのネタがつきるような嵐山先生では無いと信じています。川崎ゆきおさんの「ショート・ショート」は良かったですね、特に3番目の「海の家」は上出来、線が生きている!! こーゆーのが本当の川崎ゆきおなので、猟奇王シリーズは妹が書いているとゆー話を某氏より聴かされたことがありますが、まんざらウソでもなさそうだ。

ムチャクチャがいい

村田和義（横浜）

どうも安部慎一が最近おもしろくない感じ。迫力がなくなったと言うか何と言うか。絵がおとなしくなっちまった。なにしろ、安部の絵は、もっとムチャクチャでなければいかん。「落下傘」だの「恋愛」だのの頃のあの絵を見よ。あの何やらワメイテいるような叫んでいるような絵、あれでいいのではなかろうか。他人がヘタクソとののしろうと、一部読者がけなそうと、やっぱりあぁいった感じの方がいいと思うのだ。二月号や五月号の読者サロンでだいぶ痛めつけられてたけど、気にする必要はないのだ。どうせ今もヘタクソなのだから。（しまった、口がすべった）とにかく、飲んだくれて何やらワーッとワメイテいるような作品を書いてもらいたい。

同じ読者サロンで痛めつけられてた古川益三……こっちはよくなってきた感じだ。いつだったか「読者サロンを古川益三の讃辞でうめつくしてみたい」とか言っていたが、その日は近いかもよ。（とりあえず、この文章は古川の讃辞である）とにかく「S8」なんかすごくよかった。どこがいいかと言ったら、まず絵がいい。つまり、この人の絵は手をぬかないで描けば相当にいい絵なのだ。「紫の伝説」の前半の方はあまり見ていないので、古川が以前どんな絵を描いていたのか知らないが最近の絵は、とにかくすばらしい。がんばってどんどん「紫」を描いてほしい。

最後に楠さん、早く回復して、またいい作品を描いて下さい。それから、つげ忠男……半年に一作ぐらいじゃあ待ち遠しくてしょうがないから、せめて三ヵ月に一作ぐらい書いてほしい。それから、鈴木翁二……女の子に人気があるからと言ってニヤケたりしないで、もっともっとがんばってくれ。（敬称略――ごめん。楠さんだけ病気で気の毒だから敬称を使った。）

追伸　十月号、三村環様。僕も十六才……　そう言われて考えてみると僕も貴方と同じ、まったくわかっていない。（これでこの投書の意味はまったく失なわれる）この投書に関する非難・中傷・大歓迎！

通信欄

●筑摩版「つげ義春集」六〇〇円、東考社版「蟻地獄」（短篇集）以上二冊を水木しげるの作品と交換します。「日本の民話」など安い本一冊、切り抜きとでも交換します。
〒565 大阪府吹田市藤白台1-2 B 30-1
03 ☎ 06(872)8945（伊藤 徹）

読者サロン

幼きレイちゃんは……

河本史昭（大阪）

7月号、あの「もののけ」の権泰年サンの「満月うどんの夜」、なかなか良かったです。正直云うて彼、あんだけ書けるとは思てなかっただけに見直しました。いやホンマ、エカッタ。

103頁の右下部。デボチンにバンソコ大きくはって「クハ……」と笑てるアホな子、そう云えば僕の小さい頃にも近所にあんなん居てました。105頁の左上「また東千代ノ介かいな…」とボヤイてるオジンの顔にしても良う似たオッサンが近所でガキ相手のタコ焼き、鼻水すすりながらやってたんホーフツとして来ます。106頁に出てくるタッチャンの妹のレイちゃん、大きな人形背たろうた二頭身半のレイちゃんときたらこれはもう涙出てくる程愛しい存在、きっと優しい女の子にちがいありません。

考えてみればこの作品中のどの場面も私にとってはなつかしく近しい。冬にはさぞかしすきま風が冷たかろうと思われるうどん屋にしても、大阪は生野か西成といった感じのドブの香漂う横丁にしても煉炭を入れたカンテキで煮焚物をしているタッチャンの家にしても20年近く前の私の生活領域に全て存在していた。してみると話としては他愛もないこの作品になんとも云えぬなつかしさ、あたたかさを感じ、挙句の果ては思い入れを込めて二頭身半のレイちゃんを見やっている私の、この思い入れの実体は自分の生活体験と重ね合わせての単なるノスタルジアなのだろうか？

それにしても郷愁と呼ぶには余りにも口惜しい過ぎ去りし日々よ。権泰年サン、あなたもそんな日々を生きてきたのですか？

たなびく雲の絶え間より洩れ出づる月の影のさやけさはタッチャンの顔照らしてまばゆいばかり。や、な、起こしたてまつりそ。幼きレイちゃんは、寝入りたまひにけり。

権サン。悪い友達(?)に毒されることなくこれからもガンバッテ下さい。

（追記）107頁の屋根の上からネコの背中越しに見おろしたシーン。右手に氷屋のオバン、左手に昔なつかしいスケーターを配しての「うらぶれ」たオッサンの図は秀逸です。

言いたいこと

前田信子（松戸）

何と複雑な漫画本でしょうか。私にとってガロは文学書以上に理解しにくく、難しい本なのです。

鈴木翁二さん。貴男という方は、きっとデリカシイだけで生きているのではないでしょうか？　夜行の「泣きの雨」信じていいのでしょうか？貴男のようなやさしい人がこの世界に居ることを……。

安部慎一さん。私は貴男の大人ぽさがたまらなく好きなんです。遠まわしの数少ない会話の中にひそんでいる大人の感じが好きなんです。貴男の作品を読んでいると太宰を思い出します。

私は正直のところ、太宰に恋しているので、従って安部さんの作品に恋するわけです。

私はとても一生けん命、ガロを読んでいる事を誰かに話したくて、ここに書いているのです。漫画をマンガとしか受け取らない人が多いから、そんな中で私はどうしても言いたかったんです。鈴木翁二はそのまま詩になるし、安部慎一はそのまま文学になるということを……。

読者サロンに出ている方々の様な難しい事は何も言えないのですけれどガロを読んで、真剣にうなづいている事は胸を張って言えるのです。これからもガロを読みます。そしてみんなが変な意地をはってなかなか言わない、やさしさやあたたかさを大切にしたいと想うのです。

最近のガロは……

長島弘幸（群馬21才）

最近のガロは何て云っても鈴木翁二と秋山しげのぶが良いんだなあ。安部慎一もねえ、古川益三も良かったんだけどねえ、何て云うか安部は〝無頼の面影〟以後しばらく続いてたあの、やせがまんみたいのねえ、あれが無くなっちゃったみたいでやっぱしああ云うのが良いと思うし、古川の変な気負いみたいのね、たとえば夜行とか、淡紫抄の時のね、あれがちょっとね。

翁二はもう、やはり良いなあ。結局翁二云うのは決して宮沢ケンジに流されてる訳じゃ無くてね、タルホの無機的な感じ云うのも何となくあってね、そこら辺がこう、入り組んで僕らのかなり心情的な幼児体験みたいなのね、たとえばこう薄ぼんやりとゆれる裸電球の思い出とか、真夏のランニングシャツの輝きみたいなのね、あれだよね。あれ女の子に解かるんだろうかねえ。秋山はあのね〝このいやらしい冬にあの月見草を想う俺等とあのばか者どもとの違いが判らんのかあ…〟あそこら辺でもう、まいっちゃった。でも彼はそれを口に出して云えないってのか、云わないって所ね、そこだよね。あ、それからしげのぶさん、あんまし難しい事はいわんといて下さい。

外は雨が降ってて、ラヂヲはなぜか懐しのバーズがターン・ターン・ターンをやってます。今日の夕暮は風がとっても良かったんで〝良い風ですねエ〟

って前歩いてる女の子に云ったら〝もっと強い方が良いです〟って云ったんで調子狂ってしまいました。もう梅雨ですかねえ。すっからかんついでに恋しさまで値切んないように気をつけなくちゃね。大田で雨宿りするんなら、そうえんって喫茶店が良いですよ、高級土着喫茶です。じゃ待ってますから。

古川益三論
（紫の伝説の系譜を辿って）

井上恒憲（小倉24才学生）

啞の少女……益三が最も欲情をそそられる対称。益三の脳髄には少女（処女）強姦願望が深くどす黒く潜んでいるのではないだろうか。ふとマッチ売りの少女のあのあどけない姿が目に浮かんでくる。

《紫》といった抽象概念を執拗に追い続ける。《紫》を直接手に握りしめることはなくても、いつの日か湖のほとりで、まだ幼ない面影が、そのそばかすの顔に残っている永遠のヴィーナスとの行為を夢想する。その夢想とは未だ実現出来ない美化、理想化された観念であると云う点で《紫》という極めて（益三にとっては具体的であるのだろうが…）難解な抽象概念と接点を持つ。益三がもう再び戻ることはない過ぎ去りし日の追憶を淡々たるタッチで描く時、それはある程度自慰行為たるそしりは免れ得ないが、その持つ雰囲気に於て、我々のセンシティブな魂を揺さぶるのである。我々にとって遠い少年の日の追憶というのはやはりノスタルジックであり、その幼い汚れのない瞳に草の露がひかる時、たまらない程のセンチメンタルな気分になる。

こうして我々が《紫》を追い求める益三と心（情）的結合を企り、パトスを共有する。各々の幼少年期に於て、一度は通り過ぎたであろう想い出……。

このせちがらい世の中で、我々はもう殆んど去勢されつつあるのではないか。息絶えだえに喘ぎ続けている。

夕焼けに赤く染まった海へ向かってスペルマを発射させる時の全的解放感。益三は確かに生を燃焼させていると云えるだろう。その行為がマスタヴェーションであったとしてもだ。今、我々は如何なるパトスを持ち得よう？ 今、我々は何へ向けてカルピス飛ばせよう？ 執拗に《紫》を求め続ける益三の姿は私にとっては驚異である。そこには「ふるさとに寄する讃歌」（安吾）的な女々しさは残ろうとも……。

益三よ、いつまでもその優しいまなざしだけは忘れないでくれ。

予告投書

天澤退痔瘻（匿名希望）

一九七三年という年は私たち読者にとって、「おざ式」という奇体な漫画の予告によって記憶されなければならない。

もちろんこのマ〇ガの予告はかなりしつこく、昨年10月号から「予告欄」によって発表されており、一部のエラい編集者によって熱心にキョーハクされてきた。そして今回発表された「予告」の集大成は、赤瀬川が、単なる〝予告漫画家〟にとどまらず、最近の漫画及び漫画家が課せられている原稿〆切のまさに核心的な受難者・にない手であることを、その過程において示したものである。そしてさらにあえていえば、青林堂がついに踏みこんだラデカルな赤字意識の世界は、一九七四年という年を席巻する関東大震災における出火の状況との深所での眩惑的なかかわりを示唆しているのである。

いまここでは予告以外、本当のマンガがなく、その内容にはふれたくないが、ここにみる「予告」の発展過程が、現在の私たちの創作営為、芸術自体の情況についての切実な啓示をふくんでいることは、誰も肯定できない。11コマ目の編集者が私たちの顔面によびさます戦慄は、根源的なものである。何がいったい一九七三年四月のあかせがわ原平をそこへ踏み入らせたのか。この啓示はそれまでの「予告」を単なるデマカセと考えることですませていた一部編集者・読者に対して、つよい衝撃を与えるはずである。これまでの「予告欄」の精密な検討が、私たちにのこされた最後のヒマつぶしである。読者と編集者と作者の三元論探求がついにたどりついた「おざ式」は、「予告」の根源的逆倒性・逆行主題のまさにエラ先にひっかかっている。

「ガロ」・第二期

——多様化・拡散化の時代

呉 智英

①………「ガロ」・第二期の概観

'64年9月に創刊された「ガロ」の歴史は、'71年7月号の『カムイ伝』最終回を境にして、大きく二期に分けられる。

第一期を特徴づけるものは、まず白土三平であり『カムイ伝』である。「ガロ」発刊の大きな目的として、商業性と折り合わないかもしれない大長編の発表場所を白土三平に与えるということがあった以上、これは当然のことであろう。そして、商業性と折り合わないかもしれない作品の発表場所という「ガロ」の性格は、白土三平以外の作家にとっても意欲的な作品や実験的な作品を発表する最適の場所となった。こうして、マンガ史上に残る作品や、有力新人の作品が、『カムイ伝』と並行して誌面に載り、「ガロ」は異色の月刊マンガ誌として広く知られることになる。

第二期は、非商業作・非娯楽作への誌面の開放という点において第一期を継承し、作品傾向としては、多様化・拡散化していった時期だと言うことができるだろう。

まず、非商業作・非娯楽作への誌面開放という点についてであるが、第一期と同じくマンガの可能性を広げたという意味ではかりしれない意義がある。同じような性格を持つマンガ誌として「ガロ」と並称されるものに「COM」があったが、これは'67年に創刊され、'71年に廃刊されている。それ以外は、不定期刊の同人誌に近いものや完全な同人誌にしか、こういったマンガ誌はない。「ガロ」と「COM」とでは作家や作品の傾向が異り、あえて安易なレッテルに頼るとすれば、「ガロ」は〝純文学〟、「COM」は〝市民教養〟ということになろうが、そういうちがいよりも、「ガロ」第二期が、非商業作・非娯楽作の発表場所の役割りを一手に引き受けてきたという事実の方が大きいと言えよう。

第二期を特徴づけるものが、作品傾向の多様化・拡散化である。これは、'70年代前期を境とする社会全体の思潮の変化と奇しくも一致している。この時期に、'72年の連合赤軍事件に象徴されるように、学生や青年たちによる政治運動は行きづまりを見せはじめるし、カウンターカルチャーと総称された諸文化も活力を失いはじめる。それは、戦後の思考枠の中における政治や文化が、'60年代末期から'70年頃にかけて最後の燃え上がりを見せ、ついに極相を過ぎて鎮火したのだと言えるだろう。だからむしろ、政治運動やカウンターカルチャーが燃え上がっていた時期の方が、表面的な過激さや騒乱性とは逆に、求心的な整合性の存在を見ることができるのであり、革命なり文化なりについてまっとうに論議する思考規範が生きていたのである。「ガロ」第一期の作品も、がっちりした構想を骨格にする『カムイ伝』はもちろんだが、当時前衛的と目された、つげ義春、林静一、佐々木マキたちの諸作品も、それぞれに、そして相互に、整合的な作品原理を構築しようという志向が感じられたのである。

第二期の多様化・拡散化というのは、そういった求心的な整合性がなくなったということである。マンガ家たちは、いわば散発的に非商業作・非娯楽作を描きはじめた。南伸宏(伸坊)が編集長をしていた時期(第二期の'80年まで)に、面白主義ということが唱えられたことがあるが、それは、求心的な整合性がなくなった中での「ガロ」のアイデンティティという意味であった。

多様化・拡散化という意味に以上述べたような事情が含まれているとすれば、字面の印象とは関係なく、多様化・拡散化の是非を早急に判断することはできなくなる。一面では、無方向で希薄な作品ばかりではないかという読者の不満がふえ、『カムイ伝』終了後に古

くからの愛読者で定期購読をやめる人が出てくる。もう一面では、新しい時代思潮への敏感な対応が、現実に「ガロ」出身マンガ家たちの一般誌での活躍によって証明される。
「ガロ」の第二期を概観してみれば、このようなものになるであろう。

②……内向する"私小説型"マンガ

第二期の初めである'71年から五年ほどの時期は、自己の内面世界を執拗に描く"私小説的な"としばしば形容されるマンガ家たちの作品が目立つ。安部慎一、鈴木翁二、古川益三、といった当時の若手たちの作品である。むろん、三人がテーマの共通する作品を描いていたというわけではない。三人それぞれに明白な個性のちがいはあった。安部慎一には、出身地九州の炭坑を舞台にした民衆誌のような作品もある。鈴木翁二は、宮沢賢治や新美南吉の童話を思わせるような幻想的で繊細な情緒にあふれる作品を得意としている。古川益三は、水墨画に似た筆遣いで、東洋的求道を視覚化したような連作を描いた。このように三者三様でありながら、そこに共通するのは、作品世界の提示というよりは、作者の内面の提示であった。そして、しばしば彼らは、日常生活の断片を私小説のように描いた作品も発表したのである。

彼らの内向的で文学臭の強い作品傾向は、第一期の「カムイ伝」の対極にあるものだと見ることができるだろう。また、第一期に新人として登場した林静一が、第一期の末期に発表した『赤色エレジー』という連載作も、この傾向の先駆と考えることができるかもしれない。これは、少し後に「漫画アクション」誌に連載開始された上村一夫の『同棲時代』に影響を与えた作品で、同棲する若く貧しい男女を描いた私小説ふうのマンガであった。自己の外に整合的な世界を描くことのむなしさより、自己の内側へ目を向けるという姿勢は、広く一般的にもこの時代に共通するものであった。

内向化・私小説化の傾向は、「ガロ」の非商業作・非娯楽作への発表場所の提供という性格と相性がよく、現在に至るまで「ガロ」の一つの柱ともなっている。当時は、安部、鈴木、古川の三人が常連寄稿者であった時期でもあり、新人作品にこの傾向がよく見られた。

秋山しげのぶの奇妙な作品も、この時期の「ガロ」ならではのものと言える。秋山の作品は普遍性に欠け、一般誌からの寄稿依頼もなく、ついに「ガロ」以外の読者に知られることなく終わったが、マンガに情熱を燃やす当時のマンガ青年の作品として、興味深いものがある。

菅野修は、安部ら三人の創作意欲が衰えだす'70年代半ばから登場した、やはり文学臭が強く内向的な作家である。自我の内部にわだかまる不安をテーマにした作品が多い。

③……ベテランたちの寄稿

「ガロ」が新人たちの意欲作の発表場所として知られる半面で、意外と見落とされがちなのが、既に商業誌でも名を知られたマンガ家たちの寄稿である。それらの作品は、おおむね、ベテランとしての完成度の高さと「ガロ」ならではの独自性をあわせ持っている。

第一期から第二期をまたぐように連載されたのが、水木しげるの『星をつかみそこねる男』である。これは、新選組の近藤勇を時勢に遅れた田舎侍という設定で描いた伝記作品で、水木しげるの楽天主義と虚無主義の入り混じった人生観がよく出た作品である。妖怪マンガで知られる水木には、もう一つの柱として独特の伝記マンガがあるが、そのことはあまり知られておらず、とりわけこの『星をつ

かみそこねる男』は単行本化の際の事情のため、ほとんど知られていない。不運な秀作となっている。

村野守美、楠勝平も、既発表の作品の再録も含めて佳品を載せている。楠勝平は病弱であり、'74年三月、三十歳の若さで死去した。けれん味のない佳品は愛読者が多く、その死を惜しむ声が強かった。

マンガ青年たちに熱烈なファンを持つ永島慎二も、第一期から現在まで常連である。第二期に入ってからは、メルヘンのような四コマ作『旅人くん』や『そのばしのぎの犯罪』を連載している。

ナンセンスマンガも、秋竜山、岩本久則、高信太郎が常連であった。秋竜山は、『マッコおじちゃんの嘆き』など、一般誌では見られない一面を見せた。岩本久則は、『プカリトピア』『飛べ鷺次郎』を連載し、新人の未熟な作品の中でベテランの実力を発揮した。高信太郎は、『幻想の明治』が特筆に価いするだろう。明治時代の新聞記事を基に、幻想味の濃いユーモアを描いた。

④……嘲弄する新人たち

'70年代半ばから「ガロ」に目立つようになった新しい傾向が二つある。一つは、後述するイラスト的作品であり、もう一つは、現代の基本的思考原理を嘲笑し愚弄する作品である。これは、第一期の整合的・求心的傾向をキマジメと名付けるとすれば、そのキマジメへの嘲笑・愚弄と考えていい。第二期の初めに盛んであり現在も「ガロ」の一つの柱になっている内向的作品もやはりキマジメな作品であるが、キマジメへの嘲弄という意味で、この内向的作品とも対抗するものである。

現代の基本的思考原理を嘲弄することは、早くは、'60年代後半に広く見られたことである。端的に言えば、良識への挑戦であり、ブラックユーモアである。それは、全共闘運動やカウンターカルチャーとして現われたが、やがて、それが持っていた求心性・整合性さえ嘲弄の対象になっていった。

赤瀬川原平は、こうした過程を一人の中に凝縮して再現している作家である。ニセ千円札事件で資本主義をパロディ化する作家として評価されつつ、やがて、第二期「ガロ」では、幻覚性の強い作品を連作し、左翼作家というイメージを払拭していく。

川崎ゆきおは、個性的なまでに稚拙な絵とストーリー作りで、やはり良識を挑発した。しかし、川崎の場合、むしろ嘲弄の対象を自分自身とするキマジメさがあり、私小説的な短篇に佳作がしばしばある。赤瀬川原平やつげ義春の影響を受けた平口広美にもこうしたキマジメさがあり、エロ劇画という形で良識を挑発しつつ、自己の内面の屈折を表現している。

現代の基本的思考原理への嘲弄は、懐古的な耽美趣味にも結びつく。花輪和一、谷弘兒、吉田光彦らの作品は、そうした傾向のものである。その中で花輪は、単に懐古的な耽美趣味にとどまらず、現代人にとって異世界である〝平安時代〟を恣意的に設定するという驚くべき一連の作品を描くようになった。

ひさうちみちおは、「ガロ」でデビューした当時はやや生硬な実験的な作風だった。しかし、やがて民主主義の逆説を嘲笑するような作品で広い人気を得るようになった。

以上のマンガ家たちより、さらに基本的思考原理への嘲弄の度合いが強く、いわば嘲弄が独り歩きしているようなマンガ家たちもいる。渡辺和博、根本敬、小林のりかず、みうらじゅん、泉昌之などである。いわゆる〝ヘタウマ〟型の絵を描く人たちも多く、ナンセンスマンガのナンセンスさが純化されている。その極致が蛭子能収

である。蛭子能収の作品は、彼以前はもとより、彼以後も、これほど無意味な作品を描くマンガ家は絶対に出ないだろうと思われるほど、徹底的な無意味に貫かれている。無意味ということの意味を鮮烈に描く恐るべきマンガ家である。

⑤……イラストレーションの越境

マンガ表現の範囲が広がるにつれて、隣接領域から才能ある人たちが進出してくるのは当然のことである。実験的作品にも発表場所を開放している「ガロ」は、第一期の頃から、佐々木マキのように、記号論で言う〝線条性〟が希薄で〝現示性〟が濃厚な、いわばイラスト的な作品も掲載してきた。第二期になると、イラストレーターが職業としての地位を確立してきたことと相挨って、相互越境・相互交流が起きてくる。特に、'70年代半ばから、イラスト的作品がふえだした。彼らは一様に絵が個性的で、物語の説明よりも、絵の面白さや絵が醸成する雰囲気を持ち味としている。個々の作風としては、ブラックユーモアふうあり、童話ふうあり、ナンセンスふうあり、ショートショートふうありで、一概に論じることはできない。安西水丸、増村博、湯村輝彦・糸井重里、鴨沢祐仁、たむらしげる、松尾ひろし、南伸坊、奥平イラなどが、この傾向の作家の代表である。

⑥……女性作家たち

マンガ家たちの性別が女性であるということだけで作家分類ができるかどうか、疑問がないわけでもないが、読者が、作家が女性であることに何らかの意味を見出しながらその作品を読んでいるのも事実である。やまだ紫、近藤ようこ、杉浦日向子の三人は、その意味で女性作家である。

やまだ紫は、「ガロ」系女流として三人並称される中では最も古く、'71年に登場している。主婦となった女性の日常描写が得意で、同じような立場にある女性を中心に根強い人気がある。

近藤ようこは、女性の心理の底にある情念をテーマに描くことが多い。折口学にも造詣が深く、民話の底部に潜む心情と女性とを関連させた作品もある。一般誌にも力作を発表するようになり、実力が注目を集めている。

杉浦日向子は、江戸時代の洒落た雰囲気を巧みに描く才女として人気がある。時代考証を本格的に勉強した学識が生きている。

寡作ではあるが、けれん味のない正攻法の作風で光るのが肥後十三子である。『戻ってきた日』に見られるように、肥後の作品は、絵もいささか無骨で話にも甘いところがなく、前の三人の女性作家とちがって、女性であることに力点を感じさせない。むしろ、男女を問わず、時として人目を引きやすい新趣向に走りがちな作品が見られる中で、まっとうな感動が持つ新鮮さを再認識させてくれる貴重な存在になっていると言えよう。

以上、「ガロ」の二十年をふりかえってみたわけだが、そこに、ここ二十年ばかりの間に量的にも質的にも飛躍的に成長したマンガという表現の新分野に賭ける青年たちの痛々しいまでの情熱を感じとることができるだろう。見かけの隆盛を誇るマンガ界の、あまり知られざる先端部分の二十年の歴史である。

木造モルタルの王國の貴賓室

SEIBU
西武
有楽町

ほどよい狭さの、大世界。

いよいよ、いよいよです。噂の有楽町西武のオープニングです。百貨店という名前から、いろんなモノが山ほど並んでいるというイメージでおいでになると、ちょっと予想を裏切られます。この店は、日本中に、世界中にひろがる窓口です。過去や未来を行き来する乗りものです。いままでになかったタイプの空間なので、説明しにくいのですが、ひとことで言えば「使える店」。これからは、きっとこういう店が多くなる。その一番はじめになるはずの、有楽町西武です。

有楽町西武、10月6日㊏オープン。

サントリーローヤル
標準的な小売価格5,000円 製造・販売 サントリー株式会社
60
建築家アントニオ・ガウディ(1852〜1926) どんなに才能あふれる建築家も建築主に恵まれなければ手も足も出ない。天才、ガウディも例外ではなかった。未完成のまま、彼が手を引いた建物もかなりある。それでも、彼はスポンサーが尻込みしそうな異色な案を平気で出す。拒絶されたり、設計変更を求められたことも多かったに違いない。それが、また、才能がたどるプロセスなのだろう。しかし、彼はエウセビオ・グエルという工場経営者と出あう。芸術の理解者でもあった。バルセロナ時代の若き日のピカソも擁護していた。ガウディが設計したグエル邸、コロニアル・グエル教会、グエル公園は、グエルがスポンサーである。ガウディの才能を発見し、開花させたのは、グエルなのだ。二人の「いのち」が、どこかで、ふれあっていたのだ。ローヤルと飲む人。うまい酒は、飲む人のなにかをふくらませる。ふれあうなにかがあると思う。
スポンサーもエライ。
スポンサーもエライ。

なぜか
渡辺和博
サン
ご存知.
石原真理子
サン
びっくりするほど、お湯がでる。
たっぷり入るから買いました。
(ベテラン主婦のシゲ子さん)
小さくて可愛いから買いました。
(某女子大生のサト子さん)
コマーシャルが面白いから買いました。
(コピーライターのイト井さん)
時代を感じさせるから買いました。
(いわゆる文化人のタケ村さん)
みんなが買うから買いました。
(匿名希望のK・渡辺さん)
ミニ・デカは
電気で沸かして
保温するので、どうしても
コンセントが必要なのです。
ZOJIRUSHI
象印電気エアーポット
ミニ・デカ
●高さ/28cm●容量/2.2ℓ●¥12,000

味の素KK
AJINOMOTO CO. SOY MILK SODA
pina
秘密の味
そーっと新発売ソイミルクソーダ
ピナ
pina
教えてあげない。

美シク、ヨロシク。
PARCO

ページをめくって
パラ・パラ
パラダイス
思わず興奮
ドラ・ドラ
ドラマチック
読んだ、笑っん
ハハ・ハハ
ハハピネス
読むと元気になる
COMIC
モーニング
第1・第3木曜日発売●定価200円
講談社

文藝春秋
オール讀物
[毎月22日発売]
週刊文春
[毎週木曜発売]
Sports Graphic
Number
[毎月5・20日発売]
STARRING ALL THE PEOPLE
ザッシ
エンターテイメント
世界中のホットな情報、バラエティにとんだ読みもの、味わい深い小説…。
文藝春秋の雑誌は、最後のページまでエキサイティング。一度読みだしたら、止まりません。
あと1ページ、
もう1ページで朝が来る。

長井勝一
「ガロ」編集長
―私の戦後マンガ出版史

一九六四年夏、奇妙な誌名の雑誌が創刊された。この『ガロ』のともした炎は、またたくうちに大きく燃えあがっていった……。 ●ちくまぶっくす㊶ 950円

水木しげる

のんのんばあとオレ

〝のんのんばあ〟の手引で妖しい世界をさまよいたっぷりと至福の時を送った漫画家水木しげるの少年時代。 ●ちくま少年図書館㊲ 1200円

ねぼけ人生

修羅場の連続ともいうべき人生を、したたかに楽天的に生きてきた一人の日本土人のものがたり。 1200円

タイガー立石作品集
コンニャロ＋デジタル商会
（＋＝プラス）

超常識、奇想のギャグ走る！ 代表作コンニャロ商会からデジタルコミックまで、笑撃の一冊。 1200円

オモチャをつくろう

山口 豊＝作 勝又 進＝絵

どこにも売っていない自分だけのオモチャを作ろう！ たのしい手づくりオモチャ入門書。 1200円

似顔絵どくほん

清水 勲 編

筆で逆なでペンで刺す――著名な200余人を卓抜な手法で描く〝似顔絵〟集成。 900円

まんが昔ばなし
どっぺんぱらり

村野守美 ●全5冊好評発売中

親しみやすいコマ漫画で語られる昔話絵本。ご家族そろっておたのしみください。 各680円

近代漫画 ●全6巻 1月刊

宮武外骨・滑稽新聞 ●全6巻 2月刊

〒101 東京神田小川町2-8 **筑摩書房** ☎03(291)7651／振替東京6-4123

★白夜コミックス・シリーズ好評発売中!!★

- やんのかコラッ いがらしみきお 450円
- デ・ジャブ 藤原カムイ 850円
- オトナなんかだいっきらい!! ひろもりしのぶ 850円
- ミルキィボックス 森野うさぎ 850円
- 美少女同人誌 スーパーアンソロジー 850円
- BUYO BUYO 藤原カムイ 850円
- 移動性高気圧 五藤加純 850円
- 虚空からの挑戦 寄生虫 850円
- 桃色三角 中田雅喜 850円
- ワインカラー物語 あぽ 850円
- スウェードキルシュ 白倉由美 850円
- トライアングル・ミステリアン 計奈恵 850円

●漫画ブリッコ増刊号

- ペパーミントギャラリー 680円
- ブリッコ・デラックス 680円

株式会社 白夜書房 〒160 東京都新宿区高田馬場4—28—12 ●電話〈03〉360—1341(代)

ガロ20年史おめでとうございます
毎月毎月
中古車情報・満載
車選びの高感度情報誌
CAR SENSOR
カーセンサー
お届けする中古車情報は、毎月毎月6000台を越える豊富さ。
写真とスペックをきちんと見やすく整理した
オリジナル・レイアウトだから、これは選びやすいね。
もっと選びやすくするために、
車種別価格順に選べるスーパーインデックスという
索引まで付けちゃったのは、カーセンサーだけ。
沿道別オリジナルマップで、
中古車屋さんへ直行してしまおうか。
毎月5日発売
200円
リクルート
株式会社リクルート☎(03)575 1111
〒104 東京都中央区銀座8 4 17
書店、駅売店、コンビニエンス・ストアでお求め下さい。

祝
創刊20周年
青林堂賛江
綺譚社

祝 ガロ
20周年
●商業デザイン科 2年／昼間部
●建築科 2年／昼間部
●写真科 2年／昼間部
●アニメーション科 2年／昼間部
●まんが科 1年／昼間部

季刊
読み応えがうれしい
作者の情熱がうれしい
年四回のペースがうれしい
何よりもホンモノがうれしい
つげ義春／つげ忠男／花輪和一／勝又　進／畑中　純／近藤ようこ
やまだ紫／杉浦日向子／梶井　純
ほか
本格派のためのコミック誌!!
(定価500円)
COMIC
ばく
日本文芸社

祝 ガロ創刊20年
笠松ビル
笠松ビル
(有)笠松製本所

20周年おめでとうございます
20
祝
まんが ひとすじ
まんが書店
渋谷区宇田川町 24-10
TEL 464-7193
営業時間 AM 10:00 ~ PM 10:00
年中無休!!

スミレ
TEL03-311-3578
あさがやの
洋品屋
です.
TEL-0422-
-21-6650
吉祥寺プ°チロードの
珈琲・ケーキ
屋です
Cobu

THE WOODEN-MORTARED KINGDOM

GARO

20th

memorial issue

SEIRIN-DOH

木造モルタル

の

ガロ二〇年史

一九八四年十二月一日・初版発行

お

表題……糸井重里

装幀……羽良多平吉

発行者……長井勝一

印刷……光栄印刷

製本……若林製本

う

定価……三千五百円

発行所 東京都千代田区神田神保町一ノ六十二
電話・〇三・二九一・九五五六・二四九五
振替・東京〇・一三五四七七 **青林堂**

ISBN4-7926-0132-0 C0071 ¥3500E

「木造モルタルの王国」に寄せて

——ガロ20年史——

「ガロ」有罪説

（歌手）あがた森魚

a・駄菓子っぽい哲学憧憬。
a′・非ユークリッドめく黎明への暴力。
a″・殉教者らしく被虐し、自爆するパトス。
a→a′=a″の構図の理科教室の標本のホルマリン臭さから、「ガロ」は永遠に解放されるはずもないくせに。許されるには「ガロ」はあまりに罪深すぎます。有罪!!

あせとんくせえ、いせていっくくせえ、だけどただあせ臭いだけだった学生服（ガクラン）でカッポしたね。あの函館の街から、ガロ編集部あてに、せっせと手紙書いた1965～66の頃。

バカなくせにインテリぶってバンカラぶって芥川とディランに憧れていたあの頃だよ。

東京でてから、VANヂャケットとアイヴィカットのお兄ちゃん達に羨やましさと反撥のごちゃまぜの頃、「歌がうたいたあ……」ともだえてた僕の前に「漫画が描きたあ……」と一郎の如く流飛した、つげ義春、佐々木マキ、林静一、淀川さんぽ、鈴木翁二といった流星群にどれほどアメイズイングさせられたことでしょ。ああ美し。

理科教室の薄暗さの心地良さは、母さんのお腹の中なんだろうけど、「ガロ」ってそうなんだね。いつひっくり返しても懐しいって気がしない。空気のように、だけど僕らをあやかしてそこにある。いつまでも一人前になれない子供向けの駄菓子。やっぱり罪深い。有罪!!

でも「ガロ」を語り始めると、白いものは、それが白いからこそ視つめて、黒いものも、それが黒いからこそやはり視つめすぎて、それだからこそ何事にも黒白一つつけれずに、なげやりに無責任にやってきた自己矛盾をさらけだすようなとこがあります。

僕はどこまでも楽しませてもらっている一人。「ガロはどこまでいっても「ガロ」。永遠に罪深いです。有罪!!

ガロはきっと大丈夫

（陶芸家）秋野　等・井上章子

思えば十五年前、松田君のお智恵で、岡山大学学園祭に出向かれていたガロ御一同、長井さんを初め上野さん勝又さん林さんマキさんを帰途、京都に途中下車していただいて、女房が勤めていた京都書院画廊でのガロ展に参加してもらったのが御縁で、以来数々の名作をガロ誌上で味わい、また幾度かのお正月を長井さん御夫妻、漫画家の方々と伏見墨染の我家で過し、その頃の思い出は僕らにとって忘れがたいものであります。

たびたび廻ってくるガロ存続の危機をのりこえて、今二十

周年を迎えられたことに深い敬意の念を持ちつつ、その奇蹟の軌跡が一冊の御本となることを心からお喜び申し上げます。

先日、ひょっこりひとりでおいでになった長井さんを、十二歳になった息子がいち日奈良を御案内したとき、「ウカツだねぇ僕は。子どもはこんなに大きくなってしまうんだねぇ」とおっしゃってました。あの「ウカツだねぇ」が元気よく連発されるうちはガロはきっと大丈夫だと僕らは思いました。

二十年のランナーへ

（漫画評論家）有川　優

「ガロ」は昔、私にとって一つの聖域だった。

小学生の頃、通いなれた貸本屋の片すみで「ガロ」のある一画だけが、一種不思議な拒否の臭いをはなっていた。

後年私はその「ガロ」を前に、目まぐるしいほどの日々を送ることになるのだが、当時は近づき難い魅力の世界だった。

二十年を経た今、また昔とは別の意味での聖域を感じさせる。

何が飛び出してくるかわからない期待と、失われてしまうのではないかという不安である。

「ガロ」はいつでも私にとって、あこがれのランナーなのかもしれない。

（評論家）岩家緑郎

「漫画少年」の8年間は、偉大にも、今尚大家と呼ばれて描き続ける人達を、節操を持って生み育てた。「コム」の5年間は、その点では何をしたのだろう？　俄には想い出せない。節操は確かに有ったのだけれど。

「ガロ」は、そおですか（一人の大学生が白土三平読みたさに創刊号を手にしてから、二〇年経ったのですか）、「ガロ」の20年は、偉大も矮少も衆目の判断に頼る事なく、快も不快も委細構わず、殆ど無節操に、〃漫画〃と、〃人〃とを吐出し、撒き散らした。——こんな言い方をすれば長井さんは、〃いい酒が入ると何時もそおだった様にニヤッと笑いを押えて〃いいんじゃないの〃とおっしゃる。そして、それから、いや、それから後はいらない。長井さんの押えた〃ニヤッ〃と〃いいんじゃないの〃が「ガロ」のやり方、精神なのだから。

長井さんは、再び「カムイ伝」を続ける為に「ガロ」を出し続け、私は、それを待って「ガロ」を見続けている……続く限り。

ガロには貧乏がよく似合う

（漫画家）いしかわじゅん

ぼくが貧乏学生をやりながら吉祥寺の夜を走っている頃、アベシンや翁二もまた、阿佐ケ谷の夜を走っていた。振りかえるとシルエットの街の向こうに、乞食のような益三が立っていたし、街角では白いふくらはぎを見せて幸子が泣いていた。

貧乏主義が、ぼくは好きだった。

面白主義も好きではあったし、その後も飛び飛びにガロを読み続けてはいるのだが、ヤハリ「ガロ」と言うと「貧乏」と連想してしまう。

それは多分、あの頃いつも、吉祥寺ぐわらん堂の入り口近い席に、胸ポケットに歯ブラシをさしたサファリジャケットで座っていた長井さんの姿が、ソレを連想させていたからだと思う。

ガロには貧乏がよく似合う。

どうかこれからも、ベストセラーを出す事なく頑張って欲しいと思う。

（写真家）糸川燿史

愉しみは

後ろに金庫　前に酒

両手に女　懐に「ガロ」

「ガロ」は忘れない

（評論家）小野耕世

「ガロ」の創刊が、私にとって思い出深いのは、それが私の大学卒業の年だったからだ。

私はNHKの教育局青少年部（当時）の青年班というところにもぐりこんでいて、同じ年にはいってまた仲間が、この新しい月刊漫画誌のことを教えてくれた。私はすぐに買ってその内容にひきこまれ、少しでもマンガに関心のありそうなディレクターがいると、そのはなしをした。

そのころ青少年部の少年班では「ちろりん村とくるみの木」が終り、次のシリーズの準備にはいっていた。それが井上ひさしの「ひょっこりひょうたん島」であることを私は知っていたが、その担当チーフに、「ガロ」という新雑誌は、番組の参考になるから、ぜひ資料として購読すべきだとすすめ、買わせることに成功した。もっぱら読むのは私であった。

そのうち私は、海外のコミックス狂たちと文通をはじめ、

「ガロ」も同じ号を何冊も買って送り、海外の雑誌と交換したりした。そのうちに熱がこうじて、ついに、ラジオの教養特集で「マンガ文化論」という番組を担当し、石森章太郎さんなどといっしょに、編集長の長井勝一さんに出演していただくことまでするようになった（私がまだヒゲをはやしていないころのはなしである）。

だから私は、「ガロ」というと（多くの「ガロ」育ちの優れたマンガ家たちといっしょに）、まず長井勝一さんの姿を思いうかべてしまう。

一九七四（昭和四九）年に、私は「キャロル」という映画を友人といっしょに製作してＮＨＫと問題を起こし、クビになってしまったが、その後、青林堂に顔を出した私に、長井氏が何冊もマンガの本をくださったときは、涙が出るほど嬉しかった。海外を旅して親しくなった人たちに、それらの本は渡した。

ＮＨＫを訴えての、いわゆる〈キャロル裁判〉は、なおも続いており、第二審（控訴審）の判決も近く出るはずだ。「ガロ」は二〇年、私たちの裁判は十年、まだまだである。

とにもかくにも　エライ!!

（ＣＭ作家）川崎　徹

創刊20周年、さぞ大変だったろうね。

苦しい事のみ多く決して平坦な道では　なかったろう。そういえば　私、川崎のこの20年も波乱万丈であった。父は殺されるは　姉は行方不明になるは　母は警察のお世話になるは　おまけに私自身妻に逃げられるは　会社を乗っ取られるは　ハンセン氏病になるは　ホントに辛かった。

20年という事から　話が横道にそれてしまったが　とにもかくにも　ガロ創刊20周年は　えらい!!

すてきな可能性を持ったマンガの世界

（編集者）金子勝昭

いつ「ガロ」と知り会ったのかもう思い出せないが、そこで出会った作品によって、子供の頃から馴染んできたマンガとまるで違ったマンガ、すてきな可能性を持ったマンガの世界を、ぼくは覗くことができたのだった。その後、さらにいくつかの少女マンガによって、マンガは最近の小説などよりもずっと文学的に、もっと魅力的に、人間や歴史を表現できる芸術なのだと思うようになった。

〃マンガブーム〃とやらで、「ガロ」から登場した作家の作品が、大資本の出版社からも出るようになったとき、ぼくはファンとして晴れがましいような嬉しさも感じたけれど、長井さんたちが苦労して育ててきたものがさらわれてゆくような淋しさというか胸の痛みも覚えたのである。

長井さんと苦労のこと

（漫画家）**川本コオ**

「ガロ」創刊20周年おめでとうございます。「ガロ」の歴史について自分はあまりくわしくは知りませんが、雑誌を20年も続けるということは、並大抵の御苦労ではなかったと思います。もう、ずいぶん昔のことになりますが、たしか阿佐ヶ谷の飲み屋だったと思います。長井勝一さんや漫画家仲間で飲んでまして、そのとき長井さんが、青林堂の経営が苦しく、「ガロ」の発行も危ぶまれるという話をなさいました。自分は長井さんの人柄が大好きだったので、なんとかはげましてあげたくて、「血の小便が出るまで苦労しなきゃ苦労とはいえませんよ。」と、思わずキツイことを云ってしまいました。自分よりはるかに人生経験の多い、自分よりずっとずっと苦労を体験なさっている長井さんに向って、なんという生意気なセリフを吐いたものかと、大いに反省したものでした。その後、今もって、小便をするたびに、まっ赤な小便が出るのではないかと期待するのですが、自分はまだまだ苦労が足りないようです。

長井さん、「ガロ」の灯が消えないよう、いつまでもお元気で頑張ってください。

（写真家）**桑原甲子雄**

少年時代、マンガに熱中していた頃の私をかえりみれば、それがそのまま持続して今日にいたったとはいえない。だが、つげ義春の存在を知り、同時にガロが発表のメディアであることを教えてくれたのは故石子順造氏で、一九七〇年前後のことだった。林静一、安西水丸ら、そしてエッセイの上野昂志に注目したのもこの時であったろう。ガロのマンガにより、マンガが時代の表現に密接にかかわることを新鮮な思いでしらされたことを忘れないのである。あれから、もう十五年、ガロ漫画の盛運をさらに祈る。

（漫画家）**小島剛夕**

20年、古い言葉でふた昔、そう、ガロ創刊の頃、小生の娘は丁度三歳だった。そして今その娘の娘、つまり小生の初孫が、丁度、この九月で満三歳。まったく、20年前と同じ幼児（孫です）をこの手に抱いて往時を懐しむ今日此の頃である。

あの当時、創刊された「ガロ」なる妙な本は何を目的とし、どんな傾向に向って進むものか、まるでわからなかっ

た。したがって、それについての意欲作も持ち合わせてなく、同じガロに揮うペンを白土三平氏への協力の形でやれるだけはやっていた。爾来、小生の本業は新しいコミックマガジンの新分野に入り、そして今、亦、新しい分野に挑もうとしている。

ガロ本誌に自作を発表するよりも、貸本時代の水木しげる氏や、永島慎二氏とも旧交を暖められたし、楠勝平君のいたいけな労苦をしみじみ知ったことだった。彼の亡年のちょっと前、はるばる小平の小生宅へ夏の暑い日、突然大きな水瓜を持って来てくれた。平素なかなか語り合う折もなかったので、遠路を考えて、あまり時間はなかったが、今思うと病軀にムチ打って、先々の意欲作のことを情熱的にひとり淡々と語ってくれたっけ……。

今、ガロの本誌を手にして、彼の作品が載っていない筈なのになんとなく期待感があって、全ページを開いてみるのである。実に惜しい人を亡したと思うが、それにも増して、依然として、つげ・水木・永島の諸氏、そして勝又進氏やガロの紅三点、ガロ三人娘の健闘などがガロの本を手にとり強く握りしめたい感動を与えるのである。この諸氏を峰に並べて後から後から新進の群が這い上って行く光景、それがガロを支え、ますますガロを一流誌に仕立てて行くのではないか。オセジではなく、日頃考え、そして今、二十年の歳月の立派さを痛感するのである。故に歩む吾々にとってガロは、一つの光であり、心の支えでもあるのだ。怖るべき情熱の持主、長井編集長よ、そして編集諸君、創刊30年、50年を目指して、がんばってほしいと切望する次第である。

「ガロ」われらの聖森

（脚本家）佐々木　守

創刊二〇周年おめでとうございます。

「ガロ」という奇妙な誌名について、白土三平さんの忍者の名前からとったと、長井さんが書いておられるが、最近別のところで「ガロ」という名にふれた。それは国分直一著「東シナ海の道」に収められた「種子島のガロ」という論文である。

それによれば、種子島には「ガロ信仰」があって、田の一画や村の入口に見られるこんもりした森をガロまたはガロ山と呼んでいる、とある。ガロには田がついていてガロンタあるいはカンダ(神田)といわれ、かつては免税もされ、女性がその田に入ることは禁じられ、ガロ山の木を伐ることはタブーであったという。詳しくは同書を読んでほしいが、ガロは種子島においては村の守護神であり、その森は「聖なる林」とされていたようだ。

そしていま、われらが雑誌「ガロ」を考えるとき、その二

〇年の歴史は、新しい才能と表現の守り神となり、「ガロ」を愛する者にとっての「聖なる森」となったのではないかとの感を深くする。「聖森・ガロ」がんばれと心から叫ぶゆえんである。

大プロデューサー・プランナー 長井勝一さんへのてがみ

（NHKテレビディレクター）佐々木昭一郎

「ガロ」編集長　長井勝一様。

「ガロ」生誕二十年、心からおめでとうございます。私は今でも「ガロ」の定期購読者です。ひと月にいちど「ガロ」を手にするたびに長井さんを想い出しております。

ごぶさた、ゆるして下さい。

長井さんにお目にかかってから、今年でもう10年になります。木の匂いのする青林堂の編集室で、私は長井さんと奥さん、それに南伸坊さんたちとはじめて会いました。皆、一生懸命に働いておられた姿が、つい昨日の如くに想い出されます。その節は誠にありがとうございました。あの時、私は「ガロ」で生まれた、つげ義春さん、林静一さん、滝田ゆうさんたちの作品をテレビジョンで映像化するためにうかがったのでした。長井さんのことは詩人の鈴木志郎康さんからよくうかがっていましたが、あの名作マンガの作者たちを生み出した長井さんに拝顔したい、と願って青林堂にうかがったのでした。お目にかかった時の印象は、鈴木志郎康さんからうかがっていたとうりでした。私の印象は、普通のアティテュードを持った名白楽、というものでした。テレビジョンの世界で、長井さんのような名プロデューサーがいたならば、どんなにか倖せなことだろうか、と思ったものです。その思いは、今でも変りません。一生懸命に創作した作品を太陽の如くの笑顔で受けとめて、世に送り出されるという仕事は、さぞかし大変でしたでしょう。宮沢賢治がもし生きていたなら、賢治は長井さんによって世に送り出されていたことでしょう。死んでから世に出るほど作者にとって不倖なことはありませんから、「ガロ」で育った作者たちは、皆倖せだろうと信じます。今、世に洪水の如くにあふれ、読み親しまれているマンガ本や雑誌の生誕の場所が、青林堂のあの編集室であることを、若い人たちに私は知らせたいと思っています。心ゆさぶられるマンガを書きたい人たち、読みたい人たちは、青林堂と「ガロ」の名を忘れずにいてもらいたい、と願うものです。余計なおせっかいで、すみませんが、本心です。

長井さん、また青林堂にふらりと遊びにうかがいたいと存じます。奥さまはじめ、「ガロ」の皆々さまにどうか宜しくお伝え下さい。

八月十日　敬具

（「写真時代」編集長）**末井　昭**

「ガロ」というと、これはもうビンボーの代名詞のようなものです。ビンボーの概念があやふやになった現在（いま）「ガロ」がビンボーなのかどうか分らないけど、青林堂はまだビルを建てていません。

ぼくは、生まれるとすでに環境はビンボーだったので、ビンボーには親しみを覚えます。ぼくのビンボーは、生まれてから23年間続きました。24歳位から、池袋のピンサロの看板描きがハンジョーしだして、ビンボーではなくなりました。

昔は、ビンボーは嫌われたものですが、最近はノスタルジーのようになってしまい、「アタシ、ビンボーを経験してみたい」というようなギャルもいます。

「ガロ」のビンボーは、まだ20年で、ぼくよりまだ3年短いのですから、これからもがんばってビンボーの記録を達成してもらいたいと、心から思っています。

（国際アニメーション研究所所長）**杉本博道**

「ガロ」創刊20周年おめでとうございます。

科学の進歩は急速に発展して、現在では新しい産業革命の時期に入っています。しかもその科学の進歩は従来の産業社会や生活を根本から変えてしまう力を持っています。もちろん芸術やマスコミの世界も例外ではありません。時代の展開は一般の予想を超えるスピードです。現代は趣味多様化の時代、出版界も従来の企画編集のスタイルでは大変むずかしくなっています。「ガロ」はそんな嵐の中で咲き続けて20年、大変素晴しいことです。「ガロ」創刊20周年バンザイ！　これからは30周年をめざしてその花に大きな実をつけてほしいものです。ほんものを極めて、やまない万年青年の長井勝一氏の情熱があればこそ、それは可能だと確信しております。

（画家）**谷川晃一**

私に『ガロ』という漫画雑誌の存在を教えてくれたのは今は亡き石子順造さんである。青林堂の編集室にも二回ほど行った。別に用があったわけではない。石子さんに誘われてついていっただけだ。

「そこの人が林静一さんね」と石子さんは水色のTシャツを着て机にうつ伏せになり鼾をかいている若者（当時！）を指した。眠っている人を紹介されたのは初めてだったが私は反射的に軽く頭を下げた。石子さんは「寝ている人におじぎ

するのか!」と笑っていた。林さんは徹夜で漫画を描いていたため私がいるあいだは目がさめなかった。
あの頃の『ガロ』は懐しい。「カムイ伝」に熱中し、「ねずみ男」に近親感をおぼえ、「つげ義春」に震撼し、「つげ忠男」に泣き、「花ちる町」や「花さく港」に酔い「滝田ゆう」のノスタルジーにひたり、「目安箱」に喧嘩のやり方を学んだ。そして私は大人になった。長井さん、高野さん、しばらくお会いしてませんがお元気ですか。

高校時代、文学、エロチシズム、思想の香りを味わっていた

(劇作家) **高取 英**

『ガロ』をはじめて読んだのは中学一年の時だった。白土三平のファンだったので、「カムイ伝」を楽しみに毎号読み続けた。高校生の時は、他に、林静一、つげ義春、池上遼一、つりたくにこなどに夢中になっていた。『COM』も併読していて、中学・高校時代は、この2誌を両方読んでいることが、誇らしげな気持になるようなところがあった。文学やエロチシズムや思想の香りを『ガロ』から感じながら、成長していったようだったと思える。大学生の時は、赤瀬川原平、花輪和一、嵐山光三郎の「真実の友」、安西水丸などに熱中していた。大学4年の時に、ぐゎらん堂で、安西水丸、高信太郎、南伸坊、呉智英の諸氏に会う機会があって、緊張したことをよく覚えている。マンガの編集をするようになって、ひさうちみちお、蛭子能収、杉浦日向子、やまだ紫などの諸氏に執筆をして頂く機会や演劇では荒木経惟氏にポスターを、吉田光彦、安西水丸両氏に舞台美術をして頂く機会があった。ぼくは時々『ガロ』とともに歩んできたのである。多分、これからも……。感謝。

(ビックリハウス編集長) **高橋章子**

「読んだ?」「読んだ」「どおだった?」「ガロしてた」「ヘー、ガロっぽいのォ?」「うん、クサイの。そのクササが、たまんなくヨイわけ」「ワカル♡ ワカル♡」
というふうな会話が、そこらにあったマンガを見ただけで成立するってことは、やっぱすごいことだと思う。
高校生の頃、誰が買ってくるのか、教室の机の上に、いつもガロが一冊だけ置いてあった。「キッタねー絵だなあ」というのが感想で、でも〝ミトコンドリアを顕微鏡でのぞいたみたいな〟高鳴りってもんがあった。
今も、そうです。ミトコンドリアってさ、根性すわってて、見飽きないっすよ。
20周年、オメデトウございます。

祝、開店20周年

（イラストレーター）長　新太

油で全店ツルツル、ヌルヌルしている、ごく庶民的な真夏の中華料理店です。

ここは、冷房なんてありゃあしない。暖房がついているのではないか、と思われるくらいムンムンしているのです。発作的に天井が抜けて、そこから油やらめん類やら、マーボ・トーフやら、そんなものが五万人前くらい流れ落ちてきます。「ワァーッ」などと悲鳴をあげる暇はありません。落ちた材料が店内でグルグル渦を巻き、人間を巻き込んでいきます。この世のものとは思えぬ魅力なのです。

これはクセになる快感ではアリマシェンカ！――『ガロ』というこの店は、開店20周年。いやはやメデタイ、メデタイ。

（漫画家）竹宮恵子

十代。「漫画命！」と燃えていた（今でも燃えていますが）頃をふり返ると、やはり〝ガロ〟がピッカピカに輝いて思い出されます。

白土三平氏をはじめ、水木しげる氏、故・楠勝平氏――すごいメンバーがそろっていました。描く方にも読む方にも迫力があった。対決、そんな気で読んでました。

自分が描く側になってだんだん読み手から離れてしまいましたが、時々目にすると、どんどん描き手もスタイルも変わって時代の流れを感じました。結構〝ペンギンごはん〟なんか笑いながら読んでいたんですよ。

〝COM〟無き今、ユニークな世界を守り続けてください。

『ガロ』に

（哲学者）鶴見俊輔

新しい仕事をはじめるのはむずかしいことですが、つづけてゆくのは、さらにむずかしいことのように思います。『ガロ』のはなばなしい出発にくらべて、その後の歴史は、山あり谷あり、しかし、創刊当時にはなかったさまざまのスタイルをつくることに力をかしてきた、そのことに感心します。『ガロ』をとおして知り得た人が、私には多く、その人たちに希望をつなぎます。

きみよ――。

（双葉社編集長）堤　任

コマーシャリズムのけばけばしい装いをつけた〝コミック・劇画〟の氾濫時代にあって、きみは、あいかわらず日陰者の身に満足している。いえば、そこがいかにもきみらしくて、

わけもなく愛しい。それに、きみの発散するちょぴり淫靡で、土俗的な、遠い日の少年の悔悟の匂いが、今も、とても新鮮に映るのだ。

きみの産みの親、長井さんが、ひっそりと顔あからめて笑うと、さまざまな人々の顔を想い起こさせられる。水木しげる、つげ義春、永島慎二、矢口高雄、村野守美、みんな敬愛する人たちばかりだ。それに、石子順造さん。千日谷会堂での、心に沁みいる告別式。前庭でのいかにも寂し気だった長井さんの姿を、思い出す。平田弘史さんにも、そこで、何年かぶりに会ったのだった。そういえば、つりたくにこさんはどうしているのかな。

きみは、しかし、充分にしたたかで、充分に反逆的でもあるようだ。稚拙で、どこか駄菓子屋ふうで、居眠りお婆さんふうだけれど、時にはその半白眼が、人の心を落着かせない。軽薄短小、軽チャー文化に、たとえ抗しきれなくても、小骨の痛みを教えてやれば、きみのドロドロは消えはしない。

お祭り囃子に浮かれ出て、いつか身にしむ夜半の風。きみの舞台は、いつまでもいまのままであってほしい。いつか、奔流の轟きをひびかせるまで。

（報知新聞記者）**栃谷　隆**

「ガロ」を語るとき、思い浮かぶのが友人のA君。私が阿佐谷（東京都杉並区）に住み付いたのは偶然からだったが、同じ町に住む〝だんさん〟こと永島慎二さんや長井さん（勝一社長）と、前後して知り合った。鈴木翁二さんと知り会えたのは、A君の紹介があったからだった。

一九七〇年を境目として、それまでは全共闘運動の心情的シンパともいえる地方の高校生、それ以後は、運動の限界が見え、個人でシコシコやるしかないと思い始めた学生時代。そういった心象と、「ガロ」はオーバーラップしていた。「いまは作家の素顔が作品に出てこない時代なのかもしれない。が、『ガロ』にはそれを期待しつづけたい」――。創刊20周年と聞いて、A君とそんな話を最近した。

（現代マンガ図書館）**内記稔夫**

「ガロ」創刊二十周年、おめでとうございます。月並みな挨拶になりましたが、内心では「エッもう二十年経ったんですか？」というのが実感です。永い様で短かかった。

今から二十年前、「ガロ」創刊号（昭和三十九年九月号）

が発売された時、「オッこれはすごい!!」と思わず声に出して、取次店の店頭で手にしたことが思い出されます。

その頃の私は、開業して九年目の貸本屋であり、また白土三平氏の熱心なファンの一人でもあったので、全くの白土個人短編誌の如きこの雑誌に、驚きと感動を憶えました。

以来、第四号からの「カムイ伝」の連載開始、それに水木しげる・楠勝平・つげ義春・永島慎二等の作品にも強く魅かれ愛読してまいりました。地味ながらも、次々と生み出される異色作品と異能作家を発掘する「ガロ」に驚異と尊敬の念を抱いています。

これからも、長井社長を始めスタッフの方々に頑張って頂き、新しい才能を見つけ、世に送り出す活動に期待して止みません。

（評論家）**野本三吉**

何のお手伝いもできないできてしまったが『ガロ』誌上で「目安箱」の原稿をしばらく書かせていただいた頃、ぼくは流浪の日々だった。リュックをかついで、山中や人混みの中を歩きまわっていた。みせかけでない本当の生き方があるにちがいないという思いの中での彷徨の日々だったが、『ガロ』には、そんな表皮を一枚ひんめくった凄さと恥づかしさがあった。日常の秩序に流されそうになる時、「ほんまのあんたは、こうやで!」とつきつける迫力がある。混沌と迷いの中から新しいものが生まれるとするなら、ぼくには『ガロ』は永遠のカオスのように思える。

底深いこのカオスの潜みから、時代を切り拓く個性と精神が、これからも生まれつづけることを期待しています。

（漫画家）**萩尾望都**

拝啓。「ガロ」に対するメッセージを書こうと思いましたが、実は私は「ガロ」のことは、ほとんど何も知らないのです。高校の頃、古本屋から四・五冊購入して、カムイ伝を切れぎれに読み、感動し心ひかれながらも、当時の私にはムズカシすぎて、それきりになりその後も時々手にする機会がありましても、やはりムズカシくて、周囲の友人らのガロに対する賛辞を聞きつつも、終始一貫して、「ウーン、ムズカシイ本だ」というのが唯一私のガロ体験なのです。恐れいります。

（毎日新聞論説委員）**原田三朗**

「若者たち」という新聞連載企画の取材で青林堂を訪ねたのは、もう十五年前のことである。白土三平さんに会うため

だった。それが長井勝一さんとの初対面。せまい事務室の隅の本棚にあった「影丸」に読みふけり、さらに湯島にあった貸本組合も訪ね、二、三十年代の貸本目録をあさった。マンガ文化に目を開いたのは、それがきっかけであった。

木更津の漁村に住んでいた白土さんのもとまで、長井さんは同道してくれた。新聞記者を四半世紀も続けて、いろいろな人に会ってきた。その中で、長井さんほど親切の人は少ない。いまでも、無知な私は、マンガのことになると長井さんのところに飛んで行く。

『ガロ』が売れず、青林堂が貧しいことに心を痛めてきた。しかし、私が長井さんのためにしてあげたことは、何もない。ただ甘えるばかりの十五年だった。長井さんと『ガロ』が、これからの二十年も続くこと――苦しみながらも――を祈るのみである。

安部慎一

(朝日ソノラマ「デュオ」編集部) **松岡博治**

ガラス板にクギを立ててキリキリさせるあの感じを、安部慎一は好きだったと思います。〃いかにして他人と気まずくなるか〃を大切にした彼に魅かれ、冷房のせいなどではない鳥肌を立てながら読んだ数々の無頼作品を住まわせた、聖と俗が出会うような『ガロ』という場所が好きでした。時とともに確実に薄れゆく、あの頃の深刻さも好きでした。日本をつぶすようなあんな危険な情熱を、もう持てない今の自分を、悲しく思います。

(筑摩書房「ちくまぶっくす」編集長) **松田哲夫**

一九六五年秋、私立高校の三年生だったぼくは、昼休みの階段教室に置き捨てられていた一冊の雑誌にであった。鮮かな赤をバックに忍者が刀をかまえて疾走している絵があり、その上に「ガロ」という意味不明な誌名らしきものがついていた。何げなく手にとり、やわらかい陽差しのなかで頁をめくっていくうちに、ぼくは、それまで見たこともないマンガの世界にひき込まれていった。

それからのぼくは、新聞と学生運動をやりたくて大学に行き、そのかたわら、青林堂の人びとの迷惑もかえりみず、「ガロ」編集部に出かけては、仕事を手伝うでもなく、ただその場にボケーッといつづけた。

あの秋の日から十九年、いまぼくが曲りなりにも編集という職業でメシが食えているとしたら、それはすべて「ガロ」のおかげだ。

未知の才能を見出し、書き手を励ます長井さんの天才的な編集作法には多くを学んだ、出版社の浮き沈みということも

知った、そして何よりも「ガロ」を通じて赤瀬川原平さんはじめ多くの友人ができ、世界がひろがった。
まともに授業に出ることなく大学をやめてしまったぼくにとって、本当の意味での〝大学〟は「ガロ」だった、といま思う。

（評論家）村上知彦

創刊の年、ぼくは中学一年だった。東京オリンピックの陰で、阪神タイガースがひっそりと日本選手権を争っていた年だ。「ガロ」は近所に住んでいた、大毎オリオンズと白土三平のファンだった二年上級の少年から借りて読んでいた。やがて彼はまんがをそれほどは読まなくなり、ぼくは彼の持っているバックナンバーを譲り受けて、「ガロ」を買いつづけた。あれから二〇年、わがタイガースはとうとう一度も優勝の美酒に酔うことができなかったが、「ガロ」が築いた様ざまな栄光の記録は、わが家の押入れのなかに、ちゃんと保存されてある。
二〇周年、ほんとうにおめでとうございます。

「ガロ」創刊20周年、本当にバンザイ！

（映画監督）森田芳光

まずは「ガロ」創刊20周年、本当におめでとうございます。また僕がメッセージを書ける事についてはとても光栄に思っております。なぜならば……「あ――いけない数々の思い出に涙してしまう……」……バックナンバーを買いに材木屋さんの上の編集部に行った事もありました。「ガロ」を読みながら、ジャズ喫茶で五時間ねばった事もありました。……（しかし、どうして僕が「ガロ」の猛烈な愛読者だったことを調査なさったのですか）。赤瀬川さんも、南伸坊さんも、渡辺和博さんも、安西水丸さんも……登場なさってヨカッタ、ヨカッタ……（あー書ききれない、ともかく今は「ガロ」関係の人の多いこと……まさかと思った蛭子さんまで登場なさって……）そして、映画監督中もっとも「ガロ」のバックナンバーを持ち、「ガロ」を語れると自称する僕も一応登場させてもらいました。「本当にみんな『ガロ』を愛してよかった……間違ってはいなかったんですね……乾杯！　ウレシイナ……」しかし僕は登場してない作家の方々の幸福も祈りたいと思います。本当に僕は「ガロ」に感謝しています。
追伸
僕が一番「ガロ」に密着した時は、四十八年から四十九年

にかけて、「ガロ」の若手が表紙を描いていた時でした。

青林堂はえらい

(漫画家) **やなせ・たかし**

ぼくは「ガロ」的な世界(もしあるとすれば)とは全く別種の世界の漫画家と思われているし、また事実そうなのだが、異次元の世界にはかえって好奇心が強く湧くもので、愛読していました。他の少年漫画誌はほとんど読まなかったのにです。

一番強い理由は白土三平の「カムイ伝」と水木しげるの「鬼太郎夜話」が見たかったのです。毎号、次の号のでるのが待ち遠しくてたまりませんでした。「カムイ伝」は白土三平の作品の中では壮大な失敗作ではなかったかと思います。あまりにも登場人物が多くなりすぎて、何か巨大な影のようなものが見えはじめた時に終ってしまったのです。しかし終ってしまうとヘソの部分がなくなったというか、ポカンと穴の開いたような寂寥感におそわれました。ガロは即白土三平とその時強く感じたのです。つまりあの作品があって、はじめて、他のいろんな秀作、たとえばつげ義春とか佐々木マキとか古川益三とか当時の他の商業漫画誌にはとても無理と思える作品が生きたとぼくは考えます。

あの頃の林静一もよかったですねえ、今のような流麗な美人画家になっていこうとはとても思いませんでしたが、あの頃から、粗末っぽい紙に刷られた少女の長いまつげは魅力的ではありました。

そして、しばらくぼくの「ガロ」愛読は中断しますが、最近はまた注目して読むようになりました。

とにかく青林堂はえらい。この漫画雑誌がつぶれないで続いているのはえらい。

この雑誌には奇妙でグロテスクな部分もあるけれど、もし「ガロ」がなかったら、日本の漫画界の若いジェネレーション、ユニークな才能というのは育つことができなくて、どうしようもない程堕落してしまったにちがいないのです。文化勲章ぐらいじゃ物足りないけど、でも絶対あげなくちゃいけません。

(読売新聞文化部) **吉弘幸介**

部数的にみて「ガロ」は、他のマンガ雑誌からすれば、とるに足りぬ存在だろう。だがマンガ界に与えてきた影響という点では、大部数を誇る雑誌の顔色を失わせるに充分な存在なのだ。

今や伝説となった、つげ義春を生んだのも「ガロ」なら、やまだ紫、近藤ようこ、杉浦日向子といった台頭する女流群

を育てたのも「ガロ」だ。これは、どう解釈すればよいのだろうか。マスの論理にからめとられて、マンガがマクチュアリティを失っている中で、少部数ゆえの自由さがあるためだといった図式的な説明も可能だろう。が、それだけでは説明不足の誇りを免れまい。十全を期すには卓越した出版人、長井勝一の事に触れなければならない。

長井さんとは二度しか会ったことがない。一度目はインタビューの仕事で、二度目は漫画集団の宴席だった。いずれも仕事がらみではあったが、長井さんのマンガに対する考え方など実に教えられることが多かった。マンガ好きでは人後に落ちないと思っていた当方だが、上には上があると感心したのだ。一人の作家のために雑誌をつくり、次には新しい才能のために、それを続けていくというのは簡単なことではない。特に、失礼ながら採算を度外視したうえとあってはなおさら。

「うちから出た新しい人が、外で活躍してくれているのを見ると冥利につきる」という長井さんの言は、多くの出版人、編集者に羨望の念を抱かせるのではないだろうか。

二十年の苦労に、マンガファンの一人としてお礼をいうとともに、「ガロ」の永続を祈りたい。「長井さん、体に気をつけて、これからもがんばって下さい。ありがとう。『ガロ』」。

（映画評論家）**四方田犬彦**

『ガロ』をはじめて読んだのは、三つ下の弟が友達のお兄さんから借りてきた創刊第三号、「スガルの死」の表紙の号で、ただちに夢中になりました。友達のお兄さんというのは小学校はじまって以来の秀才という噂で、それが後の原将人と知ったのは今年のことです。定期購読を決意したのは『カムイ伝』で正助が下人の身分を脱出する頃。バックナンバーを揃えるため、渋谷から神保町まで都電に乗り、小一時間かかって青林堂の二階を探しあてたときには、もう暗くなっていました。おそるおそる千円札をさし出す中学生のわたしに、一冊オマケしとくよ、といわれた長井勝一さんの顔を覚えています。

わたしの文章がはじめて活字になったのも『ガロ』です。六九年二月号の「読者サロン」に矢野武徳の筆名でデビュー直後の佐々木マキ氏について書いたもので、どうしてこの筆名を選んだのか、忘れてしまいました。ただ年齢は（馬鹿にされるといけないと思って）三つサバを読み、十八歳としたことを記憶しています。この劇画雑誌は、ゴダールやビートルズ同様、わたしに決定的な影響を与えました。**なにもかもが『ガロ』から始まったのです。**

（東京医科歯科大学教授）**渡辺一衛**

いつの間にか二〇年経ってしまったのですね。『ガロ』もよく続いて来ました。

『ガロ』が創刊されたころの『少年サンデー』『少年マガジン』等の「オバQ」「おそ松くん」の世界と、『ガロ』『COM』などの佐々木マキ、つりた・くにこ、岡田史子といった人々の世界とが一つになって、なつかしく思い出されます。

戦後のマンガ文化は、前者の少年雑誌系の、赤塚不二夫らトキワ荘グループを中心とする少年マンガと、貸本マンガから『ガロ』へとつながるもう一つの流れとの、二つの柱で形成されて来たと思います。その中で講談社、小学館といった大出版資本に対して、『ガロ』の青林堂は小出版社ながら、文化的には互格の役割を果して来ました。

『ガロ』と青林堂が今後とも健在で、マンガの世界にこれからも活力を与え続けて行くことを期待したいと思います。